

上野原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

新屋原遺跡

旧東相模ゴルフクラブ3番ホールコース改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

上野原市教育委員会

序

本書は、平成元年、旧東相模ゴルフ（現上野原カントリー）クラブ3番ホールコース改修工事に伴って実施した新屋原遺跡の発掘調査報告書です。上野原市教育委員会は、地域開発と文化財保護との調整を図り、埋蔵文化財を記録保存して後世に末永く伝えるため、今回の発掘調査報告書を刊行することとしました。

周辺は東京都・神奈川県との県境になる山麓地域で、県道権原藤野線に沿って裏大越路遺跡や黒田遺跡、穴沢遺跡などが分布しています。今回の発掘調査は新屋原の丘陵地で行われましたが、調査の結果、縄文時代の竪穴住居址・竪穴状遺構や、奈良時代から平安時代にかけての土坑・焼土址、また、縄文式土器・石器など多くの生活用品が発見されました。なおかつ、縄文時代の集落遺跡であることがわかつてきました。

また、編集のまとめにあるとおり、居住を主とする新屋原遺跡に対し、北側の山間鞍部にある穴沢遺跡は狩猟や動植物加工場としての機能が考えられ、同じ山麓地域で異なる土地利用があったことが想定されるところです。

本書が歴史の証として多くの方々に活用され、埋蔵文化財や郷土史への理解が深まることを願ってやみません。

最後に、調査にあたって終始ご協力いただいた株式会社ケー・エス・ジー、並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成22年12月

上野原市教育委員会

教育長 大神田光司

例 言

1. 本書は、山梨県北都留郡上野原町（現在の上野原市）桐原字新屋原、新屋原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成元年度に東相模ゴルフクラブ（現在の上野原カントリークラブ）3番ホールコース改修工事に伴う事前調査として株式会社ケー・エス・ジーの委託を受けて実施された。
3. 発掘調査は上野原町埋蔵文化財調査会において新屋原遺跡発掘調査団を結成して実施した。現場調査及び整理作業時の組織は次頁のとおりである。
4. 本書の執筆・編集は小西直樹が行った。
5. 遺構平面図と遺跡全体図の航空写真測量を国際航業株式会社に委託した。
6. 東相模ゴルフクラブ、㈱清水建設から現場作業で多大なご協力をいただいた。また、発掘調査から本書の作成までを通して、つきの方々のご教示・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
山梨県学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、木本 健、小野正文、奈良泰史、杉本正文、小坂井孝修、小俣 博、田中悟道 敬称略・順不同
7. 遺跡の調査成果はこれまで各種刊行物で報告されてきたが、本書と記述の異なる所があれば、本書をもって最終報告とする。
8. 本書にかかる出土品・記録図面等は、一括して上野原市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書に転載した地図は次のとおりである。
第1図 遺跡の位置：国土地理院発行の5万分の1地形図「上野原」・「五日市」
第2図 周辺の遺跡：平成16年国土地理院長の承認を得て複製した2万5千分の1地形図
2. 遺構図版
(1) 遺構の縮尺は1/60を基本としたが、炉・集石1/30、遺物集中部1/20である。
(2) 遺構図の「367.9 m」といった数値は標高を示す。
3. 遺物図版
(1) 遺物の縮尺は土器・石器1/3、小型石器は原寸とした。
(2) 七器断面図のうち網掛けは織維土器、黒い塗りつぶしは須恵器を示す。
(3) 石器のうち剥片の微細な剥離痕は欠印で示した。磨石の磨面は破線で示した。
4. 表
(1) 石器の法量のうち、長さ・幅については実測図の縦・横で計測した。いずれも最大値を示している。
(2) 表中の法量で（ ）内の数値は残存値を示す。
(3) 色調の判別には、「新版標準土色帖」（日本色彩研究所色票監修 1988）を利用した。

調査組織

平成元年度 現場調査

上野原町埋蔵文化財調査会

会長 佐々木正夫（上野原町教育委員会教育長）
副会長 中村律太郎（上野原町文化財審議会々長）
理事 田中 久弥（上野原町文化財審議会副会長）
長谷川 孟（上野原町文化財審議会委員）
市川 治夫（同上）
渋谷 重夫（同上）
小俣 長利（同上）
小俣 光雄（同上）
細田洋太郎（同上）
奈良 計考（同上）
水越 健成（上野原町企画課長）
中村 金雄（上野原町教育委員会教育次長）

新屋原遺跡発掘調査団

団長 中村律太郎（上野原町文化財審議会々長）
副団長 田中久弥（上野原町文化財審議会副会長）
調査主任 小西直樹（上野原町教育委員会社会教育係）
参加者 荒井泉、荒井一郎、山下芳信、吉村亀男、安藤盛平、安藤市江、戸田孝明、和智幹一、奈良義夫、山崎武雄、豊田ヨシ江、石井みづ子、上村ちかよ、出羽和夫、荒井貞、杉本すきい、荒井姫代、水越佳子、有井直美、小山善信、高橋信、久島順子、水越茂子、中村道子、上條龍子、鷹取助三、鷹取義江、半田徳雄、山崎良一、瀧口成子 敬称略・順不同
事務局 上野原町教育委員会 佐々木正夫（教育長）、中村金雄（教育次長）、山口武夫（社会教育係長）、石井源仁（社会教育係）
会計監査 奈良典子、細田邦男（上野原町役場）

平成 21 年度～ 22 年度 出土品等の整理、報告書作成

上野原市教育委員会

事務局 大神田光司（教育長）、小佐野進（教育学習課長）、久島茂夫（社会教育担当リーダー）
担当者 小西直樹（社会教育担当）
参加者 古根村典子、富岡ます美

目 次

序

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 周辺の遺跡	1
第Ⅱ章 調査の経緯と概要	6
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の経緯	6
第3節 調査の方法	6
第4節 遺跡の層序	7
第5節 縄文土器の分類	7
第Ⅲ章 調査の成果	9
第1節 縄文時代	9
(1) 穴住居址	10
(2) 穴状遺構	10
(3) ピット列	15
(4) 炉穴	16
(5) 燃上址	18
(6) 土坑	18
(7) 集石	22
(8) 遺物集中部	24
(9) 遺構外出土遺物	27
(10) 碑	44
第2節 古代	45
(1) 土坑	45
(2) 燃土址	45
(3) 遺構外出土遺物	45
第3節 落ち込み（風倒木痕）	47
第Ⅳ章 まとめ	50

挿図目次

第1図	遺跡の位置	2
第2図	周辺の遺跡	3
第3図	遺跡の範囲と調査区の位置	5
第4図	全体図	8
第5図	H-4 住居址	9
第6図	K-18 住居址、かげ址、遺物分布図	11
第7図	K-18 住居址出土上遺物	12
第8図	I-20 竪穴、出土遺物	13
第9図	G-4 穂穴、遺物分布図、出土遺物	14
第10図	G-5 竪穴、G-5 炉穴	15
第11図	G-5 ピット列	15
第12図	F-1 炉穴、遺物分布図、出土遺物	17
第13図	H-8 炉穴	17
第14図	H-17 焼土址群	17
第15図	土坑(1)	18
第16図	上坑(2)	21
第17図	土坑(3)	23
第18図	集石(1)	23
第19図	集石(2)	25
第20図	土器集中部	25
第21図	上器集中部の出土遺物	26
第22図	遺構外の縄文土器(1)	31
第23図	遺構外の縄文土器(2)	32
第24図	遺構外の縄文土器(3)	33
第25図	遺構外の縄文土器(4)	34
第26図	縄文土器分布図、接合図	35
第27図	遺構外の石器(1)	38
第28図	遺構外の石器(2)	39
第29図	遺構外の石器(3)	40
第30図	遺構外の石器(4)	41
第31図	遺構外の石器(5)	42
第32図	遺構外の石器(6)	43
第33図	石器分布図	44
第34図	礫の分布状況	44
第35図	古代の遺構・遺物分布図	45
第36図	I-17 上坑、I-16 焼上坑	46
第37図	出土土器	46

第38図	落ち込み覆土平面図、断面図、完掘	48
第39図	落ち込み出土遺物	49

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	4
第2表	石器一覧表(1)	36
第3表	石器一覧表(2)	37

写真図版目次

図版1	調査前全景
図版2	H-4 住居址、K-18 住居址
図版3	I-20 竪穴、G-4 竪穴
図版4	G-5 竪穴、G-5 かげ穴
図版5	G-5 ピット列、F-1 炉穴
図版6	H-11 上坑、I-8 土坑、I-15 区1号上坑、I-15 区3号土坑、I-20 土坑、J-19 土坑、L-22 土坑
図版7	C-3 土坑、E-2 上坑、G-11 土坑、H-18 土坑
図版8	I-15 区2号土坑、I-7 土坑、J-15 土坑、G-19 上坑
図版9	G-4 集石、J-16 集石
図版10	I-17 土坑、I-16 焼土址
図版11	J-20 落ち込み確認、完掘状況
図版12	K-20 落ち込み確認、完掘状況
図版13	調査風景
図版14	K-18 住居址遺物、I-20 竪穴、G-4 竪穴、F-1 炉穴、L-22 土坑出土遺物
図版15	J-18 土器、F-4 上器集中部、J-20・K-20 落ち込み出土遺物
図版16	遺構外出土土器(1~43)
図版17	遺構外出土土器(45~89)
図版18	遺構外出土土器(90~102)、遺構外出出土石器(1~27)
図版19	遺構外出土石器(28~56)
図版20	遺構外出土石器(57~70)

第Ⅰ章 遺跡の位置と周辺の環境

第1節 遺跡の位置

新屋原遺跡がある上野原市は山梨県東端の県境に位置する。市域の大部分が壯年期の急峻な山地で占められ、桂川（相模川）及び支流の鶴川・仲間川・秋山川の沿岸に狭小な河岸段丘地形が発達している。段丘上は集落が形成され、主要な生活基盤となっている。本市は関東地方西部に隣接しているため、産業や文化・通婚・日常生活全般において古くから東京都や神奈川県・埼玉県方面との関係が強い。また、近世には江戸・甲府・信州を結ぶ甲州街道が整備され、桂川の水運とともに東西交通の要衝地として栄えた歴史を持つ。

新屋原遺跡は上野原市桐原地区の生藤山（990.6 m）南西麓に位置する。一帯は県境の長大な尾根（三頭山稜）から派生した全長2～3kmの支脈が平行して連なる山林地帯であり、この支脈の先端部に本遺跡は位置する。周辺の地質は四万十統に属する三倉層群の深城層にあたり、砂岩・粘板岩・頁岩・チャート・石灰岩・輝緑凝灰岩・礫岩などで構成されている。

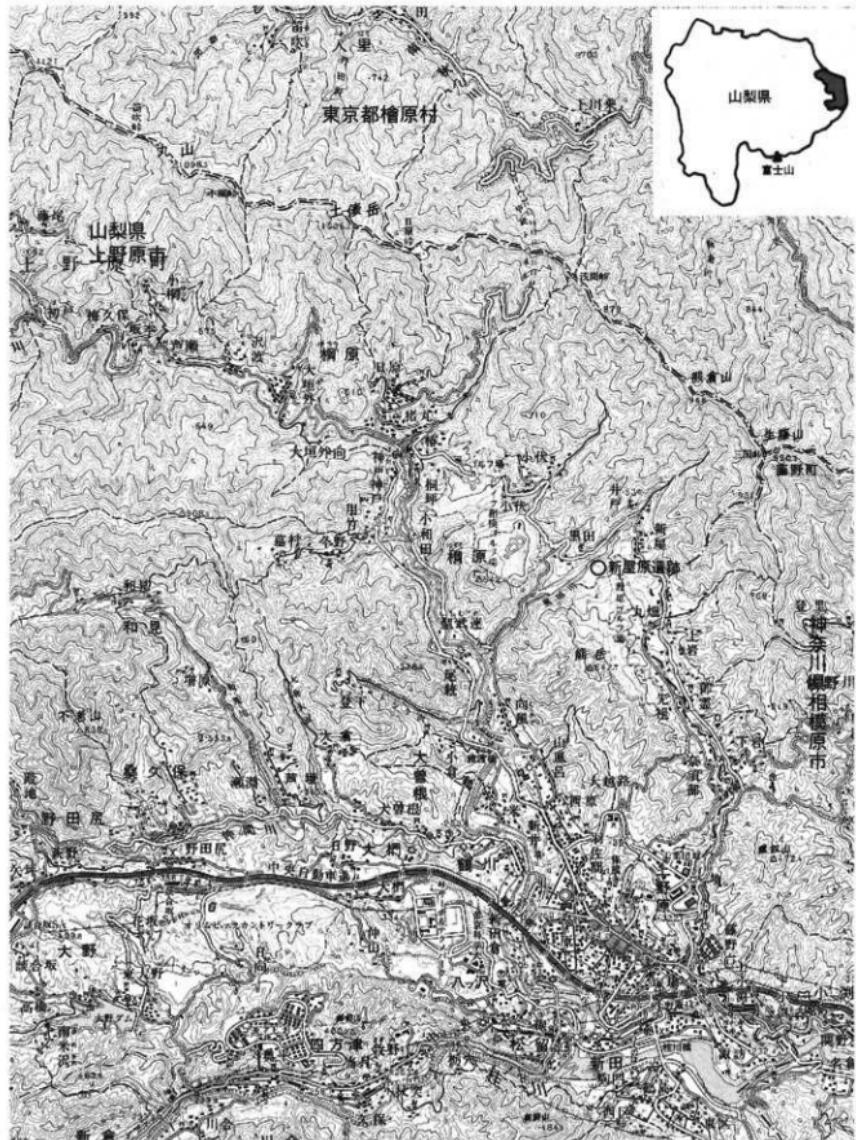
本遺跡は新屋集落の西に延びる細長い丘陵上に広がっているものと推定される。丘陵の上位は傾斜が強いが、下位は平坦で舌状台地のような景観を呈する。北側に沿って鶴川支流が深い谷を形成し、南側は小規模な支谷が樹枝状に発達している。今回の調査地点は平坦地の一角にあたり、標高は373 m～366 mである。

第2節 周辺の遺跡

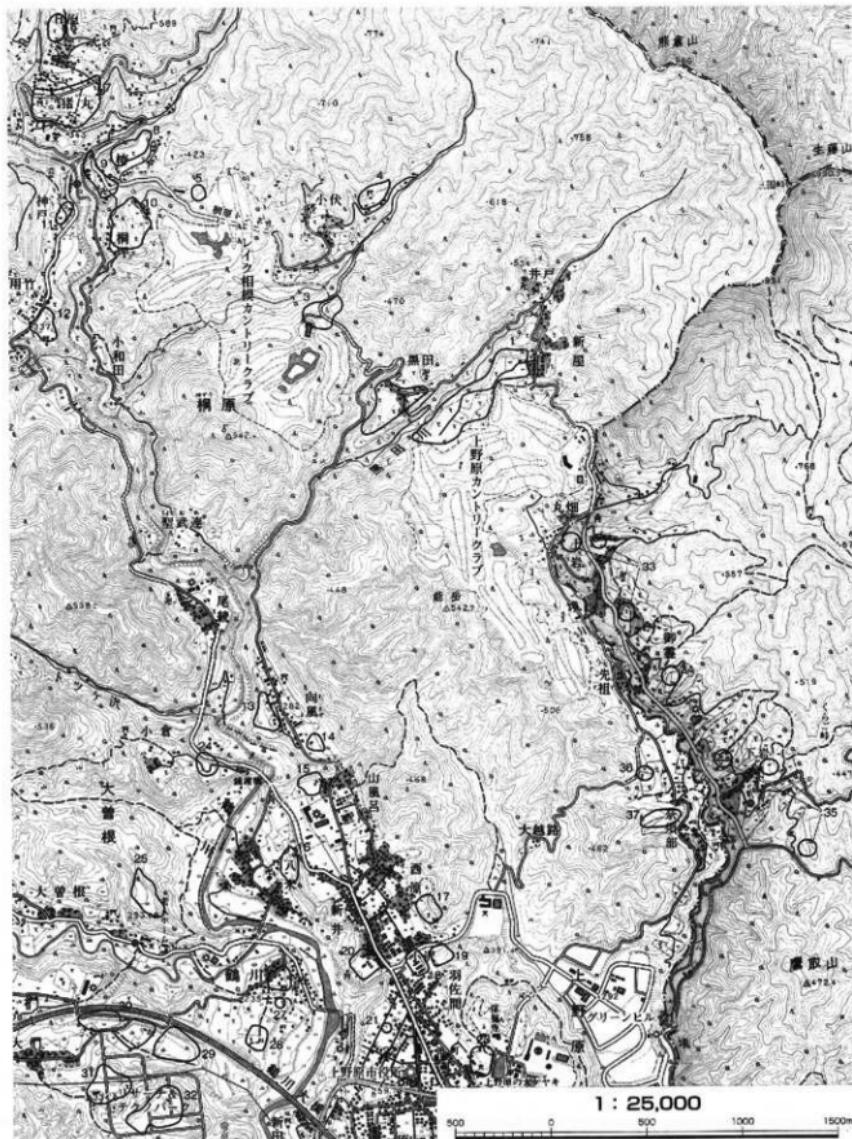
本遺跡が位置する県境の山麓地域では、鶴川や境川流域に遺跡が分布している。大半の遺跡は表面採集や工事中の不時発見で把握されているのみであり、発掘調査の事例は少ない。

鶴川流域の遺跡は山裾の緩斜面や小規模な河岸段丘上に分布し、概ね縄文・古墳・平安時代の土器が採集されている（第2図）。このうち用竹（殿村）遺跡（12）は鶴川西岸の段丘上に位置し、発掘調査で縄文時代中期後半から晩期の土器・石器・集石・焼土址が検出された。対岸の下柳遺跡（9）では、桐原中学校の敷地造成時に縄文時代後期から晩期の土器や敷石遺構等が発見されている。

本遺跡を含む鶴川支流や境川流域の遺跡は、県道桐原藤野線に沿う形で分布している。本遺跡の対岸に位置する黒田遺跡（2）は縄文時代中期の遺物散布地である。穴沢遺跡（3）は山の鞍部に位置し、発掘調査で縄文時代早期から晩期の土器・石器が多量に出土した他、落し穴6基・ピット3基・焼土址4ヶ所が検出された。神庭遺跡（4）は縄文時代中期及び古墳時代の遺物散布地であり、急傾斜の畑地から多量の縄文土器や石器が採集されている。一方、境川流域の斜面地に位置する裏大越路遺跡（36）では、縄文時代早期の土器・石器、落し穴1基が検出されている。



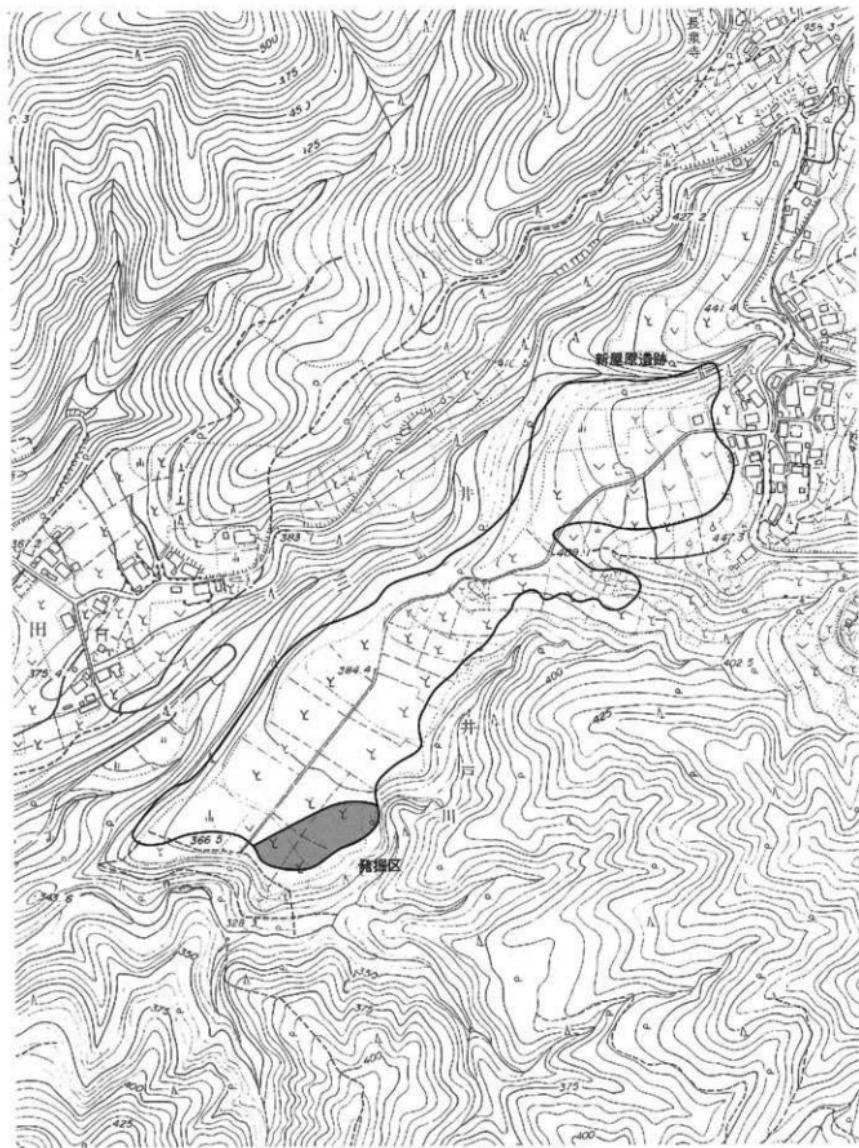
第1図 遺跡の位置



第2図 周辺の遺跡

No	遺跡名	時代	特記事項
1	新屋原遺跡	縄文早期～後期、奈良時代	4,000m ² 発掘。本編に記載。
2	黒田遺跡	縄文中期	
3	穴沢遺跡	縄文早期～晚期、奈良～平安時代	3,600m ² 発掘。縄文時代の土坑・ピット・焼土、古代の土坑検出。
4	神庭遺跡	縄文中期、古墳時代	
5	カイル遺跡	縄文早期～中期	330m ² 発掘。土坑4基検出。
6	日原本光寺遺跡	縄文前期	
7	猪丸遺跡	縄文前期～後期	
8	椿和田原遺跡	縄文中期	
9	下椿遺跡	縄文後期	樺原中学校造成時に敷石遺構が発見された。
10	桐坪遺跡	縄文中期	
11	用竹(神戸)遺跡	弥生	
12	用竹(殿村)遺跡	縄文早・中・後・晚期	160m ² 発掘。縄文時代の集石・焼上・埋設土器・遺物集中部検出。
13	向風II遺跡	縄文後期、平安時代	
14	向風I遺跡	縄文前期	
15	山風呂遺跡	縄文前・中期	
16	八米遺跡	縄文	
17	西シ原遺跡	縄文早・前期	
18	大堀I遺跡	縄文中期	町営住宅建設に伴う発掘で、平安時代の竪穴住居検出。
19	大堀II遺跡	縄文早・中期	96m ² 発掘。縄文中期の竪穴住居・土坑・ピット・焼土検出。
20	新井遺跡	縄文早・中期、平安時代	
21	寺畠遺跡	縄文中期	148m ² 試掘。縄文中期の遺物集中部・古代の土坑・ピット検出。
22	大間々遺跡	縄文、古墳～平安時代	3,100m ² 発掘。余良・平安の竪穴住居、掘立柱建物を多数検出。
23	上野原小学校遺跡	縄文中期、古墳～奈良時代	350m ² 発掘。縄文中・後期の遺物集中部・古代の竪穴住居検出。
24	小倉遺跡	縄文早期	
25	大曾根遺跡	縄文中期	
26	上野山I遺跡	縄文後期	
27	上野山古墳	古墳時代	
28	上野山II遺跡	縄文中期・弥生後期	
29	大浜遺跡	縄文中期～後期、平安時代	6,000m ² 発掘。縄文早期の土坑・中期の竪穴住居検出。
30	南大浜遺跡	縄文中期	1,600m ² 発掘。縄文早期の土坑・弥生中期の再葬墓検出。
31	大門I遺跡	縄文・後期	18,000m ² 発掘。縄文早期の土坑320基・中期の竪穴住居検出。
32	大門II遺跡	縄文早期	縄文早期の土坑191基・竪穴住居・中期の敷石住居検出。
33	上岩遺跡	縄文・後期	
34	御靈遺跡	縄文中期	
35	下岩遺跡	縄文中期	
36	裏大越路遺跡	縄文早期	320m ² 試掘。縄文早期の土坑検出。
37	奈須部遺跡	縄文早・中期、古墳時代	

参考文献 『上野原町誌(下巻)』1975、藤野町教委「ふじ乃町の埋蔵文化財」1978、上野原町教委「牧野遺跡・大倉遺跡・大堀I遺跡」1980、上野原町教委「穴沢遺跡・カイル遺跡」1992、上野原町教委「用竹(殿村)遺跡」1998、上野原市教委「市内遺跡発掘調査報告書」2006、「山梨県史」資料編1原始古代1998、山梨県埋蔵文化財センター「南大浜遺跡」2000



第3図 遺跡の範囲と調査区の位置

第Ⅱ章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

平成元年(1987)6月12日、山梨県北都留郡上野原町(現在の上野原市)上野原にある東相模ゴルフクラブ(現在の上野原カントリークラブ)3番ホールコース改修工事の開発申請書が、事業者から上野原町に提出された。改修計画はゴルフコースに張り出した丘陵の一角を削って直線的なコースに変更するもので、この丘陵上が周知の埋蔵文化財包蔵地(新屋原遺跡)であった。本ゴルフ場は、県境の生藤山(990.6m)南西麓から能岳(向風山542.7m)東麓にかけての山林を造成して昭和61年にオープンし、開発当初は工事区域内に遺跡は確認されなかったものの新屋原遺跡が隣接するため、山梨県や上野原町は事業者に対し工事に当たって注意するよう指導した経緯があった。

改修計画を受けて、上野原町教育委員会は遺跡の遺存状況を確認するため、平成元年(1987)8月3日~8月24日に試掘調査を実施した。調査は開発予定地に10m間隔で試掘溝(4m×1m)を33ヶ所設定し、遺構や遺物を確認しながら地山ローム層まで掘り下がった。この結果、縄文時代早期から前期にかけての土器・石器や竪穴住居跡・土坑等が、開発予定地の東西2ヶ所に集中する傾向が確認された。

9月8日、事業者から文化財保護法に基づく発掘届が提出され、山梨県文化課や事業者と協議の結果、開発地約4,000m²を対象に発掘調査を実施することになった。調査は上野原町埋蔵文化財調査会のもとで新屋原遺跡発掘調査団を組織して実施した。

第2節 調査の経緯

平成元年(1987)9月26日から10月4日まで、草木除去、抜根作業、バックホーによる表土剥ぎを行った。10月5日から多数の作業員を投入して掘削面の精査を開始し、第Ⅱ層以下はベルトコンベアを用いて人力で掘り進めた。第Ⅲ層から土器や礫の出土が目立ち始め、実測や取り上げ作業を行ながら遺構確認を進めた。途中、町立上野原小学校々舎改築に伴う遺跡発掘調査を行うため、11月17日~27日にかけて作業を中断した。

12月下旬から遺構の検出を開始したが、1月に入り度数の降雪があり、調査完了日を月末から2月10日へ延期した。航空写真測量を実施したが、除雪が間に合わず地形測量は断念した。2月6日、上野原警察署に埋蔵物発見届を提出し、発掘調査は2月10日までに終了した。

第3節 調査の方法

グリットは調査区の形状に合わせて5m方眼で区切り、東西軸にアルファベット、南北軸に算用数字を付した。各グリットはA-1区などと表示した。南北軸の方向は磁北に対してN-35°-Wを示す。

表土はバックホーで掘削し、第Ⅱ層以下をスコップやジョレンを用い、土層観察用の畔を残しながら掘り下げた。遺物は出土位置の平面と標高を計測して取り上げたが、礫の大半はグリット毎に一括して取り上げた。

遺構は覆土の堆積状況や遺物を確認しながら検出し、基本的に遺物分布図・土層図・断面図を作成した。平面図は遺跡全体図と併せてヘリコプターによる航空写真測量で作成した。遺構の名称には発見されたグリットの表示名を付した。

第4節 遺跡の層序

基本的な層序はつぎのとおりで、全体に南西方向へ傾斜している。第Ⅰ層は表土層。第Ⅱ層は黄褐色土で、土師器や須恵器を含む。第Ⅲ層は黒褐色土で縄文時代の土器や石器、多量の礫を含む。第Ⅳ層は暗褐色土で、ローム漸移層である。第Ⅴ層は橙色土で、ローム層である。全体に平坦部の堆積状況は安定し、地表からローム面まで 80cm～100cm であったが、谷に面した縁辺部では表土直下がローム層となる。

第5節 縄文土器の分類

第Ⅰ群 早期中葉、沈線文系土器群

- 第1類 平行沈線文と短沈線文が施されるもの
- 第2類 波状口縁で平行沈線文が施されるもの

第Ⅱ類 早期後半、条痕文系土器群

- 第1類 沈線文と押引文が三角形状の区画で施されるもの
- 第2類 沈線文が施されるもの
- 第3類 納条体压痕文が施されるもの
- 第4類 山形の貝殻腹縁文や斜交条痕文が施されるもの
- 第5類 口縁部に横位の網隆起線文が施されるもの
- 第6類 口縁部に縦位の貼付文が施されるもの
- 第7類 刻目隆帶が施されるもの
- 第8類 条痕文
- 第9類 無文
- 第10類 底部

第Ⅲ群 前期前半、胎土に纖維を多く含み縄文等の施される土器群

- 第1類 燐糸压痕文が施されるもの
- 第2類 縄文が施されるもの

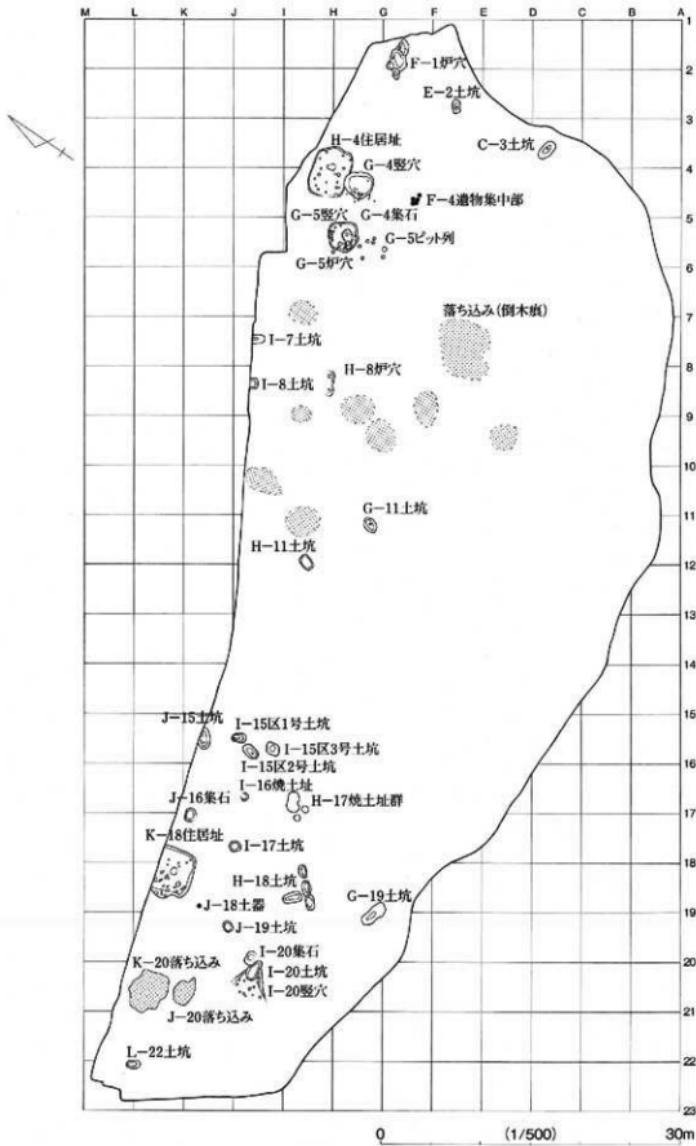
第Ⅳ群 前期後半の土器群

- 第1類 連続爪形文が施されるもの
- 第2類 縄文地に平行沈線文や円形刺突文が施されるもの
- 第3類 平行沈線文が施されるもの
- 第4類 縄文のみ施されるもの

第Ⅴ群 中期の土器群

- 第1類 半裁竹管による角押文が施されるもの
- 第2類 ペン先状工具による三角押文が施されるもの
- 第3類 口縁部が無文で胴部に文様帯を持つ深鉢形土器
- 第4類 口縁部が大きく外反する大型の深鉢形土器
- 第5類 条線が施されるもの
- 第6類 八の字状列点文が施されるもの

第VI群 後期の土器群

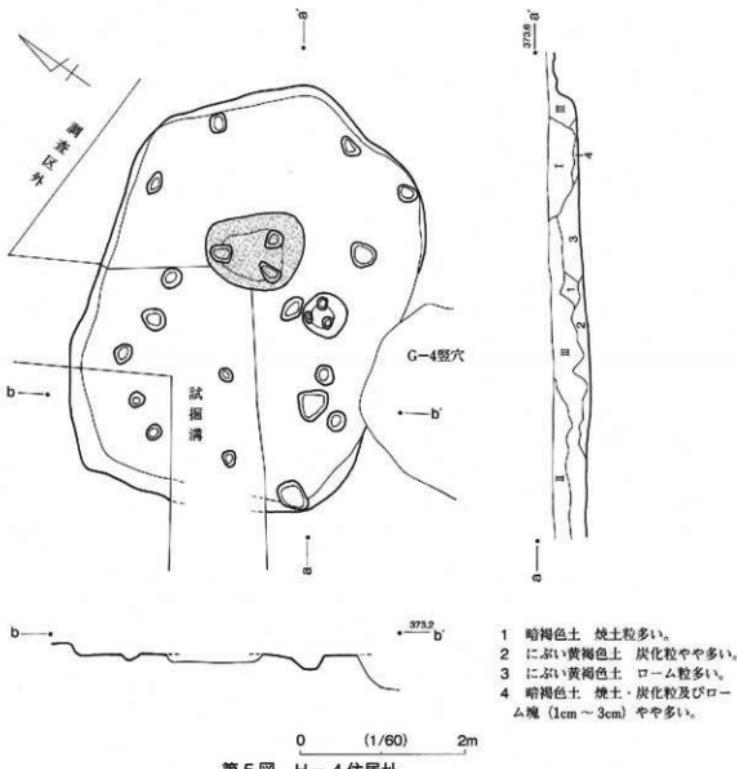


第4図 全体図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居址2軒、竪穴状遺構3基、ピット列1ヶ所、炉穴3基、焼土址群1ヶ所、土坑15基、集石3基、土器集中部2ヶ所である。遺物は縄文時代早期から後期の土器や石器が出土し、多くは早期後半から前期のものである。遺構・遺物の分布は調査区の東西に分かれる。



第5図 H-4 住居址

(1) 穫穴住居址

H-4 住居址 (第5図、図版2)

- 位置 調査区東側 (G-3・4区、H-3・4区) の緩斜面に位置する。南壁でG-4 穫穴と重複するが新旧関係は不明である。確認面は第IV層上面である。
- 形状・規模 平面は不整長方形で、長軸 535cm・短軸 360cmを測る。上軸方位 N-70°-E。
- 床・壁 床は第V層中に構築され、西側へ緩やかに傾斜している。壁高は最高 20cmである。
- ピット 穫穴内に 21 基検出され、東壁沿い及び炉西側で環状に分布する。直径 15cm~40cm、深さ 10cm~26cm。
- 炉 住居中央部からやや東側に寄った位置にあった。平面は不整梢円形で長軸 100cm・短軸 80cm。断面は皿状で深さ 10cm。覆土は焼土粒を多く含む暗褐色土で、地山の焼土化は見られなかった。
- 覆土 床面を暗褐色土・にぶい黄褐色土が覆い、全般に焼土粒・炭化粒を多く含む。
- 遺物 織数点が床面で出土したのみである。

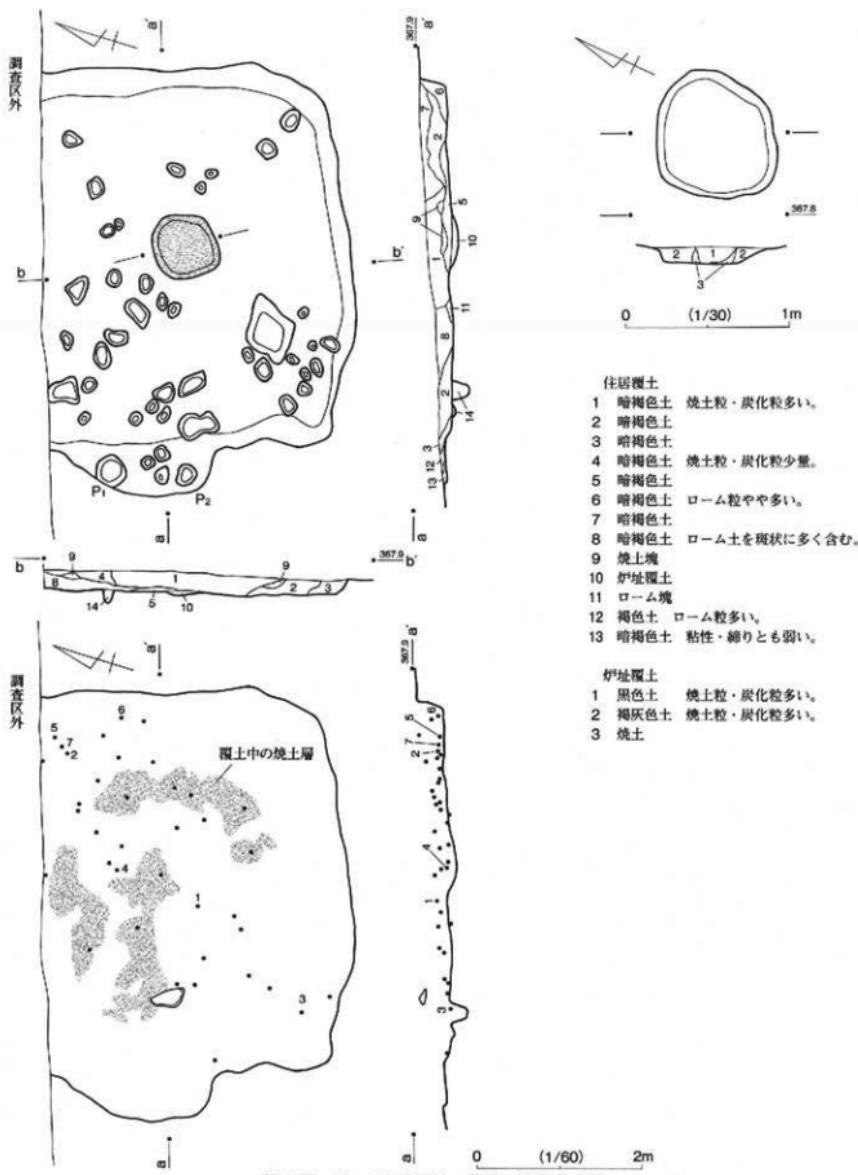
K-18 住居址 (第6図~7図、図版2・14)

- 位置 調査区西側 (J-17・18区、K-17・18区) の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。
- 形状・規模 北側が調査区外にかかるが、平面は方形基調と考えられ、南壁の長さは 430cmである。西壁の一部が外側に 50cm張り出す。炉と張り出し部を結ぶ主軸方位は N-74°-E。
- 床・壁 床は第V層中に構築され、ほぼ平坦である。壁高は最高 34cmである。
- ピット 穫穴内に多数検出された。直径は 10cm~48cm、深さは 5cm~25cm。多くのピットに規則性は見られないが、張り出し部両側のP-1・P-2 は対に配置されたものと考えられ、深さは 12cm前後である。
- 炉 住居中央付近に位置する。平面不整形で、長軸 80cm・短軸 76cm、深さ 10cm。覆土は焼土粒・炭化粒を多く含む。地山の焼土化は見られなかった。
- 覆土 暗褐色土中に焼土層が堆積する。焼土は厚さ 5cm以下で、焼土塊や炭化粒が混じる。
- 遺物 土器 2点、石器 5点、黒曜石・チャート・凝灰岩の剥片 7点、礫 26点が出土した (第7図)。1 は波状口縁部で、鋸齒状の擦痕を地文に平行沈線文が施される。胎土に目立った含有物は見られない。色調は黄褐色。硬質で焼成は良い。第I群第2類で、田戸上層式と思われる。2 は無文の織維土器で金雲母を多く含む。色調は暗褐色で焼成は良い。第II群第9類。3 は打製石斧、4 は石匙、5 はスクレイバー。6 は使用痕のある剥片で、側縁の一辺に微細な剥離痕が連続する。7 は黒曜石の石核で、端部に平坦な打面を残す。出土位置は、1 は焼土層直上、2・7 は床面、他は覆土下層の床面付近。

(2) 穫穴状遺構

I-20 穫穴 (第8図、図版3・14)

- 位置 調査区西側 (I-20区) の斜面に位置する。I-20 土坑に切られ、I-20 集石が近接する。確認面は表土直下の第IV層中である。
- 形状・規模 斜面下方は壁が欠失し、平面形は不明確である。南東壁の検出長は 300cmである。
- 床・壁 床は第V層中に構築され、ほぼ平坦である。壁高は最高 16cmである。
- ピット 穫穴内で 19 基を検出した。直径は 15cm~25cm、深さは 20cm前後である。
- 覆土 黒褐色土やローム塊との混合土が主体で、木の根が多く混入している。
- 遺物 土器 1点、石器 2点、礫 17点が出土した (第8図)。1 は織文地に竹管文を持つ土器である (第IV群第2類)。2 は打製石斧、3 は回石である。いずれも床面あるいは床面に近い位置で出土した。



第6図 K-18 住居址、炉址、遺物分布図

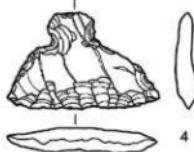


1

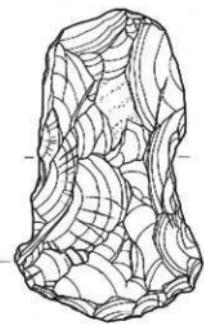


2

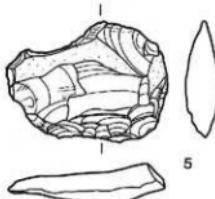
0 (1/3) 10cm



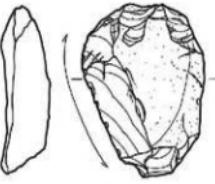
4



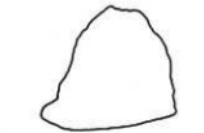
3



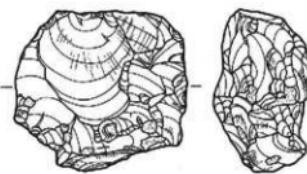
5



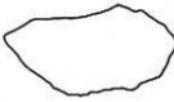
6



0 (1/3) 10cm

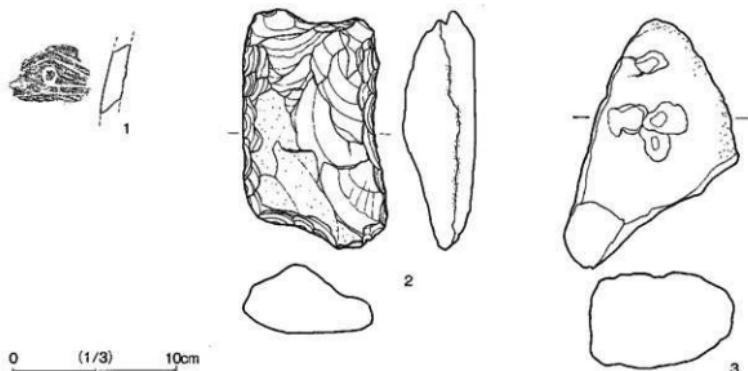
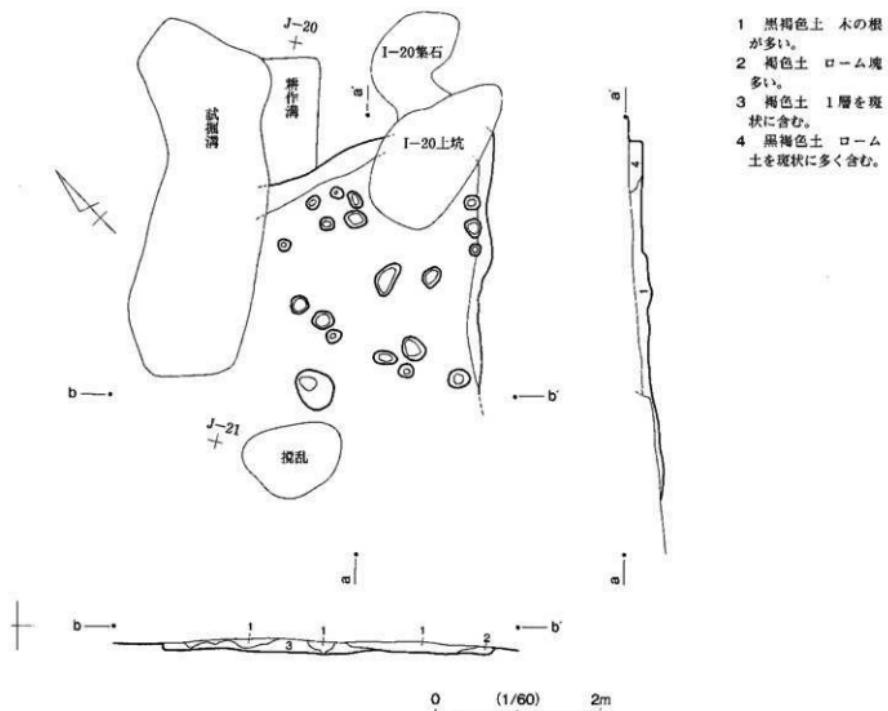


7



0 4~7 (2/3) 10cm

第7図 K-18住居址出土遺物



第8図 I-20堅穴、出土遺物

G-4 竪穴 (第9図、図版3)

位置 調査区東側 (G-4区) の緩斜面に位置する。北壁がH-4住居址と重複するが新旧関係は不明である。確認面は第IV層上面である。

形状・規模 平面は不整方形で、長軸 290cm・短軸 250cmを測る。主軸方位 N-10°-W。

床・壁 床は第V層中に構築され、不規則な凹凸が見られる。壁高は北壁 80cm、南壁 60cm。壁は急傾斜で立ち上がる。南西壁面の下位から床面が一部焼土化していた。

ピット なし。

覆土 暗褐色土、にぶい黄褐色土が堆積する。

遺物 土器5点が床面に散在する (第9図)。1は金雲母を多く含む無文の纖維土器 (第II群第9類)。

G-5 竪穴 (第10図、図版4)

位置 調査区東側 (G-5区、H-5区) の緩斜面に位置する。北西側にH-4住居址、G-4 竪穴が隣接する。G-5炉穴と重複する。確認面は第IV層中である。

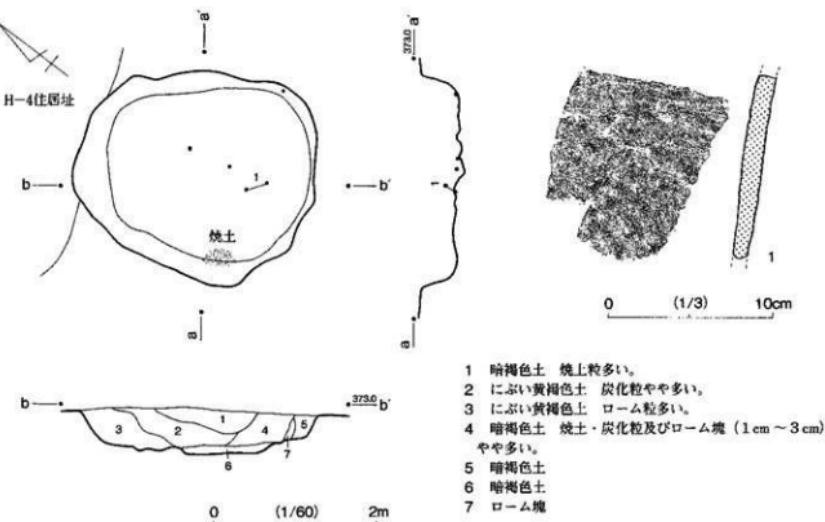
形状・規模 平面は不整方形で、1辺 300cmを測る。

床・壁 床は第V層中に構築されてほぼ平坦だが、半分近くをG-5炉穴で切られている。壁高は10cm~15cm。

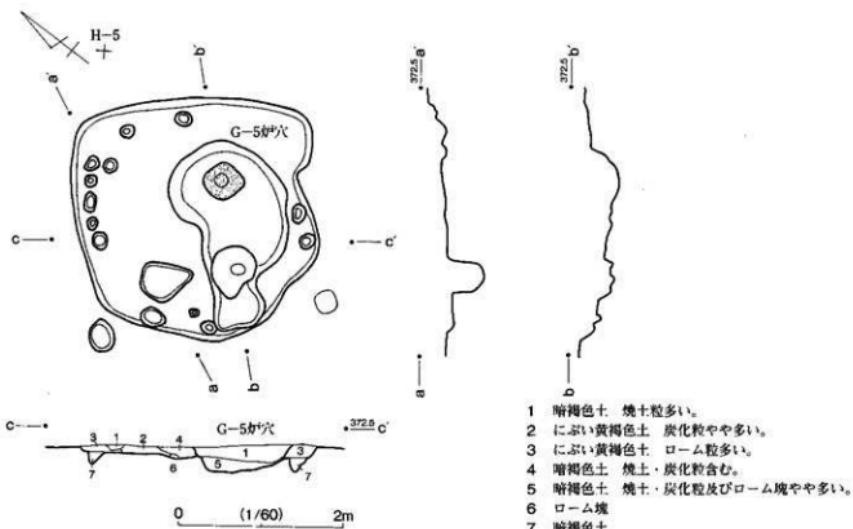
ピット 竪穴内の壁沿いに14基を検出した。直径は15cm~20cm、深さは20cm前後のものが多い。竪穴外の西側に近接してピット1基 (直径40cm、深さ11cm) があるが、竪穴に伴うものか不明。

覆土 暗褐色土・にぶい黄褐色土が堆積し、全般に焼土粒・炭化粒を多く含む。

遺物 なし。



第9図 G-4 竪穴、遺物分布図、出土遺物



第10図 G-5豊穴、G-5炉穴

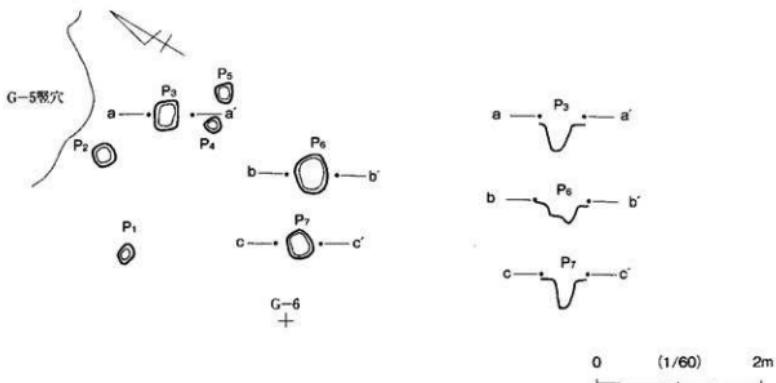
(3) ピット列

G-5ピット列 (第11図、図版5)

位置 調査区東側 (F-5区、G-5区) の緩斜面に位置し、G-5豊穴に近接する。確認面は第IV層中。

形状・規模 ピット7基が直径3m内で環状に分布する。ピットは直径20cm~50cm、深さ10cm~30cmである。

遺物 なし。



第11図 G-5ピット列

(4) 炉穴

F-1 炉穴 (第12図、図版5)

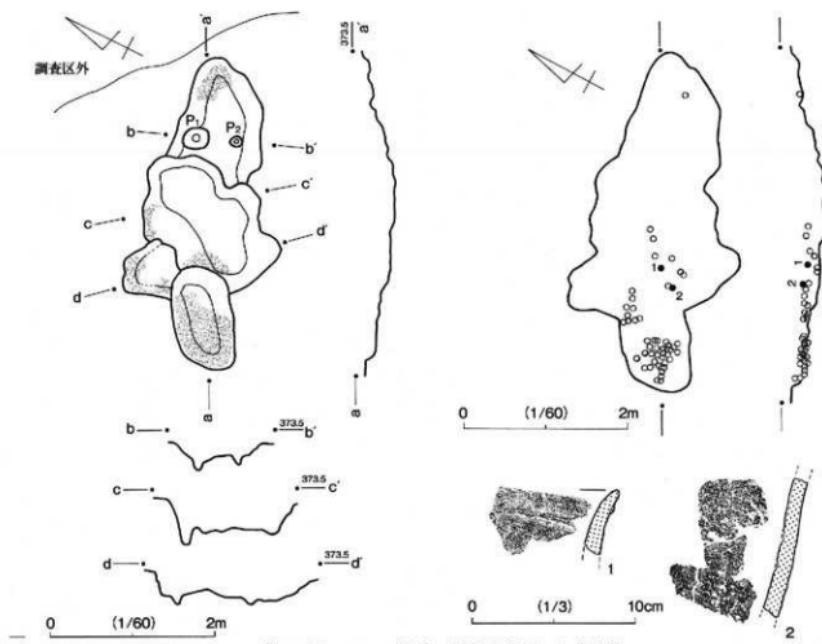
- 位置 調査区東端 (F-1・2区) の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。
- 形状・規模 平面は東西方向に長い不整形を呈し、長軸420cm、中央部の最大幅は170cmを測る。複数の穴が重複しているものと考えられ、西端に炉が伴う。
- 床・壁 床は第V層中に構築され、中央部が深くなっている。壁高は最高40cm。壁から床面に焼土化した部分が4ヶ所で見られた。
- ピット 東側でピット2基を検出した。P1は直径30cm・深さ30cm、P2は直径15cm・深さ20cm。
- 炉 西端に位置し、集石を伴う。掘り込みは平面不整楕円形で、長軸140cm・短軸80cm、深さ20cm。覆土は焼土粒・炭化粒が多く含み、地山は焼土化していた。礫は拳大以下の破損礫が大半で、底面を中心に分布していた。礫の一部に赤化や吸炭などの被熱痕が見られた。
- 覆土 黒褐色土・暗黄灰色土が堆積し、全般に焼土粒・炭化粒を多く含む。
- 遺物 土器2点、礫8点が覆土中で出土した(第12図)。1は波状口縁部に横位の低平な隆帯が付く(第II群第5類)。胎土は纖維、多量の金雲母や石英、砂礫を含む。色調は黒褐色で、焼成は良い。2は無文の纖維土器(第II群第9類)で、金雲母・砂礫を多く含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。

G-5 炉穴 (第10図、図版4)

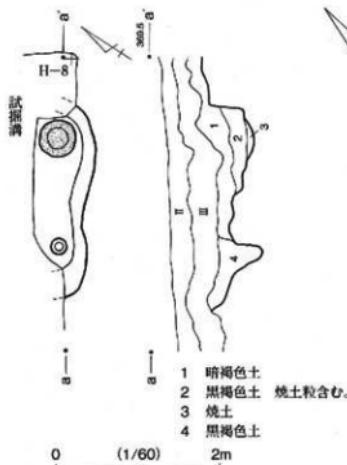
- 位置 調査区東側のG-5竪穴に重複する。炉穴はG-5竪穴の覆土上面から床面下に達しており、竪穴の埋没後に構築されたものと考えられる。
- 形状・規模 平面不整楕円形の燃焼部に足場が付随する。長軸は240cm、燃焼部の最大幅は140cmである。足場の幅は燃焼部側で100cmを測り、端部は幅50cmまでばらまく。主軸方位N-85°-E。
- 床・壁 床は第V層中に構築される。足場は燃焼部に向かって緩やかに傾斜する。壁高は燃焼部で最高35cm。
- 炉 燃焼部の中央に位置する。掘り込みは平面不整方形で、長軸48cm・短軸45cm、深さ20cmである。覆土は焼土粒・炭化粒を多く含む。
- ピット 足場の中央部で1基を検出した。直径50cm・深さ15cm。断面は鍋底状を呈し、凹凸が見られた。
- 覆土 暗褐色土を主体とし、焼土粒を多く含む。
- 遺物 なし。

H-8 炉穴 (第13図)

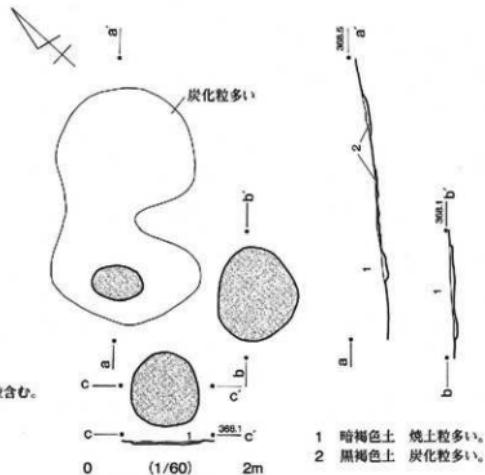
- 位置 調査区東側(H-8区)の緩斜面に位置する。確認面は第IV層上面である。
- 形状・規模 試掘調査時に大半を掘削してしまった。平面は細長い不整楕円形と考えられ、燃焼部から足場にかけて緩く括れる。検出規模は長軸250cm、短軸90cmで、主軸方位N-55°-E。
- 床・壁 床は第IV-V層中に構築され、燃焼部にかけて緩やかに傾斜している。壁は燃焼部で直立気味に立ち上がり、足場では緩やかな傾斜となる。壁高は燃焼部で最高40cmである。
- 炉 燃焼部の東端に位置する。掘り込みは平面円形で直径40cmである。深さは10cmで、断面は皿状を呈する。覆土は焼土粒を多く含み、地山は焼土化していた。
- ピット 足場の南西端で1基を検出した。直径30cm・深さ40cm。
- 覆土 暗褐色土や黒褐色土が堆積する。
- 遺物 なし。



第12図 F-1 炉穴、遺物分布図、出土遺物



第13図 H-8 炉穴



第14図 H-17 焙土址群

(5) 焼土址

H-17 焼土址群 (第14図)

位置 調査区西側 (H-16・17区) の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 焼土址3基が近接して確認された。このうち2基は平面不整円形で、直径80cm及び100cmの範囲に焼土粒が最厚3cmで堆積する。他の1基は平面楕円形で、長軸60cm・短軸40cmの範囲に焼土粒が最厚3cmで堆積し、周囲には炭化粒を多く含む黒褐色土が薄く広がっていた。いずれも地山の焼土化は見られなかった。

遺物 なし。

(6) 土坑

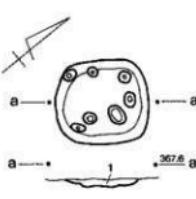
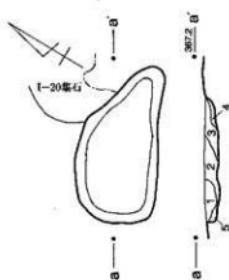
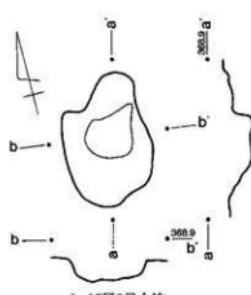
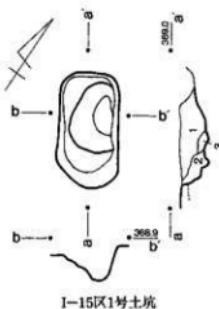
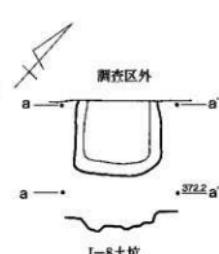
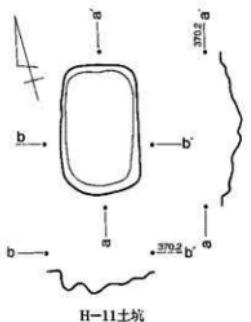
H-11 土坑 (第15図、図版6)

位置 調査区中央部 (H-11・12区) の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 平面は隅丸長方形で、長軸160cm・短軸100cm、深さ10cmを測る。主軸方位N-16°-E。底面は第V層中に構築され、不規則な凹凸が見られる。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 磬2点が覆土中に出土した。



I-20土坑
第15図 土坑(1)

0 (1/60) 2m

I-8 土坑（第15図、図版6）

位置 調査区東側（I-8区）の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 一部が調査区外にかかるが、平面は長方形を基調とするものと考えられる。短軸100cm、深さ10cmで、主軸方位はN-30°-W。底面は第V層中に構築され、不規則な凹凸が見られる。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 なし。

I-15区1号土坑（第15図、図版6）

位置 調査区西側（I-15区）の緩斜面に位置し、I-15区2号及び3号土坑が近接する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 平面は不整長方形で、長軸144cm・短軸75cm、深さ30cmを測る。主軸方位N-30°-E。底面は第V層中に構築される。西壁に沿って一段深くなつており、最深部は44cmを測る。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 なし。

I-15区3号土坑（第15図、図版6）

位置 調査区西側（I-15区）の緩斜面に位置し、I-15区1号及び2号土坑が近接する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 平面は不整形で、長軸165cm・短軸105cm、深さ10cmを測る。主軸方位N-10°-E。底面は第V層中に構築される。中央部が一段深くなつており、最深部は35cmを測る。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 なし。

I-20 土坑（第15図、図版6）

位置 調査区西側（I-20区）の緩斜面に位置する。I-20竪穴を切って構築されている。I-20集石とも重複するが新旧関係は不明である。確認面は第IV層中である。

形状・規模 平面は不整形で、長軸190cm・短軸100cm、深さ18cmを測る。主軸方位N-85°-E。底面は第V層中に構築され、緩やかな起伏が見られる。

覆土 暗褐色土が主体となり、壁際に褐色土が堆積する。

遺物 瓢5点。

J-19 土坑（第15図、図版6）

位置 調査区西側（J-19区）の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 平面は隅丸方形で、長軸115cm・短軸104cm、深さ8cmを測る。主軸方位N-40°-E。底面は第V層中に構築され、ピット状の不規則な落ち込みが多い。

覆土 暗褐色土。

遺物 なし。

L-22 土坑 (第16図、図版6・14)

- 位置 調査区西端 (K-22区、L-22区) の斜面地に位置する。確認面は第IV層中である。
- 形状・規模 平面は不整楕円形で、長軸134cm・短軸80cm、深さ25cmを測る。主軸方位N-30°-W。底面は第V層中に構築され、底面は南側がわずかに深くなる。
- 覆土 暗褐色土が主体となる。
- 遺物 土器2点が覆土第1層から出土した。1は金雲母を多く含む無文の繊維土器である。第II群第9類。2は網文地に竹管文を持つ土器で、遺構外と接合した。第IV群第2類で、諸磯式に比定される。

C-3 土坑 (第16図、図版7)

- 位置 調査区東側 (C-3区) の斜面地に位置する。確認面は第V層上面である。
- 形状・規模 平面は長楕円形で、長軸184cm・短軸100cm、深さ75cmを測る。主軸方位N-100°-E。底面は平坦で、斜面下方側にあたる東端にピット1基 (長軸34cm・短軸20cm、深さ24cm) を検出した。
- 覆土 暗褐色土が主体となり、壁際に地山のローム塊が混じる。
- 遺物 なし。

E-2 土坑 (第16図、図版7)

- 位置 調査区東端 (E-2区) の緩斜面に位置する。確認面は第V層上面である。
- 形状・規模 平面は不整長楕円形で、長軸140cm・短軸78cm、深さ75cmを測る。主軸方位N-60°-E。底面は平坦で、西端にピット1基 (長軸24cm・短軸16cm、深さ14cm) を検出した。
- 覆土 暗褐色土が主体となる。
- 遺物 なし。

G-11 土坑 (第16図、図版7)

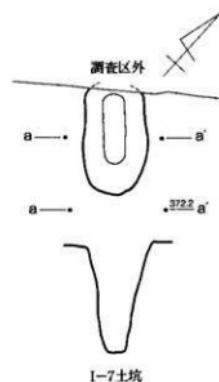
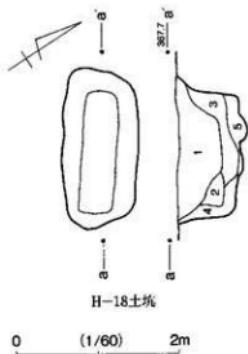
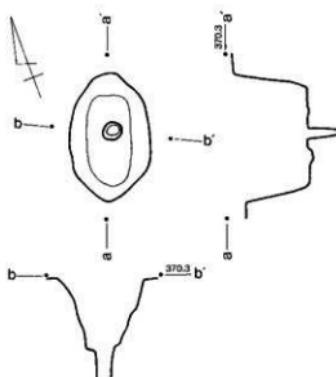
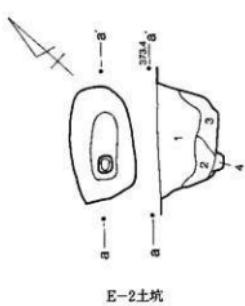
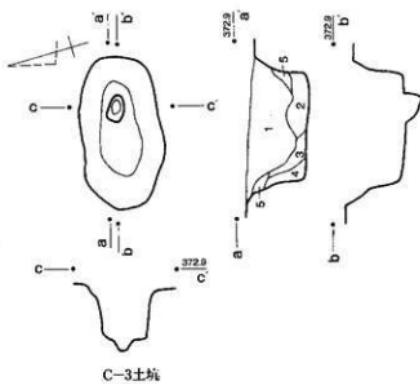
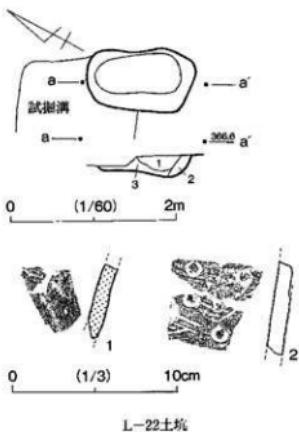
- 位置 調査区中央部 (G-11区) の緩斜面に位置する。確認面は第V層上面である。
- 形状・規模 平面は不整長楕円形で、長軸158cm・短軸100cm、深さ90cmを測る。主軸方位N-20°-E。底面はほぼ平坦で、中央部にピット1基 (長軸25cm・短軸20cm、深さ44cm) を検出した。
- 覆土 暗褐色土が主体となる。
- 遺物 なし。

H-18 土坑 (第16図、図版7)

- 位置 調査区西側 (H-18区) の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。
- 形状・規模 平面は不整長方形で、長軸198cm・短軸94cm、深さ75cmを測る。主軸方位N-40°-W。底面は平坦だが、中軸上でわずかな窪み2ヶ所が並列する。
- 覆土 暗褐色土が主体となる。
- 遺物 なし。

I-15区2号土坑 (第16図、図版8)

- 位置 調査区西側 (I-15区) の緩斜面に位置し、I-15区1号及び3号土坑が近接する。確認面は第IV層中である。



第 16 図 土坑 (2)

形状・規模 平面は不整長方形で、長軸 178cm・短軸 90cm、深さ 80cmを測る。主軸方位N - 16° - E。底面はほぼ平坦だが、南端にピット 1基（長軸 35cm・短軸 20cm、深さ 35cm）を検出した。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 なし。

I - 7 土坑（第 16 図、図版 8）

位置 調査区東側（I - 7 区）の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 一部が調査区外にかかる。平面は不整長楕円形で、長軸の検出長 130cm・短軸 80cm、深さ 135cmを測る。主軸方位N - 35° - W。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 なし。

J - 15 土坑（第 17 図、図版 8）

位置 調査区西側（J - 15 区）の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 一部が調査区外にかかる。平面は不整長方形で、長軸 210cm・短軸 110cm、深さ 80cmを測る。主軸方位N - 53° - E。底面はほぼ平坦だが、中軸上にピット 3基（直径 15cm～20cm、深さ 12cm～20cm）が並列する。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 なし。

G - 19 土坑（第 17 図、図版 8）

位置 調査区西側（G - 18・19 区）の緩斜面に位置する。確認面は第IV層中である。

形状・規模 平面は不整長方形で、長軸 265cm・短軸 120cm、最深 46cmを測る。主軸方位N - 70° - W。壁から底面は緩やかに統き、境は不明瞭である。

覆土 暗褐色土が主体となる。

遺物 なし。

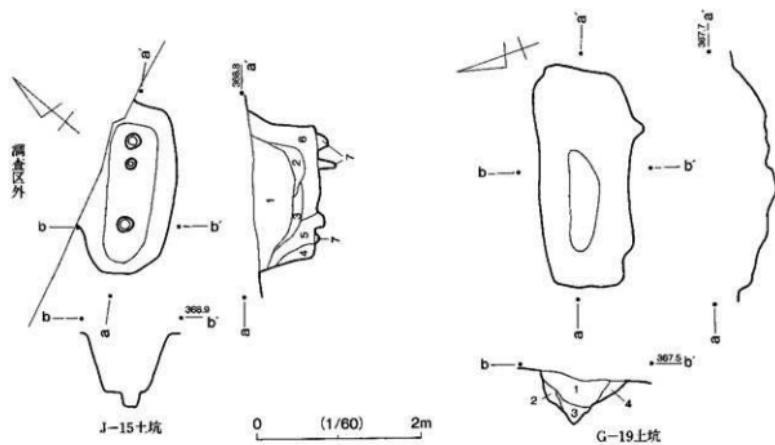
(7) 集石

G - 4 集石（第 18 図、図版 9）

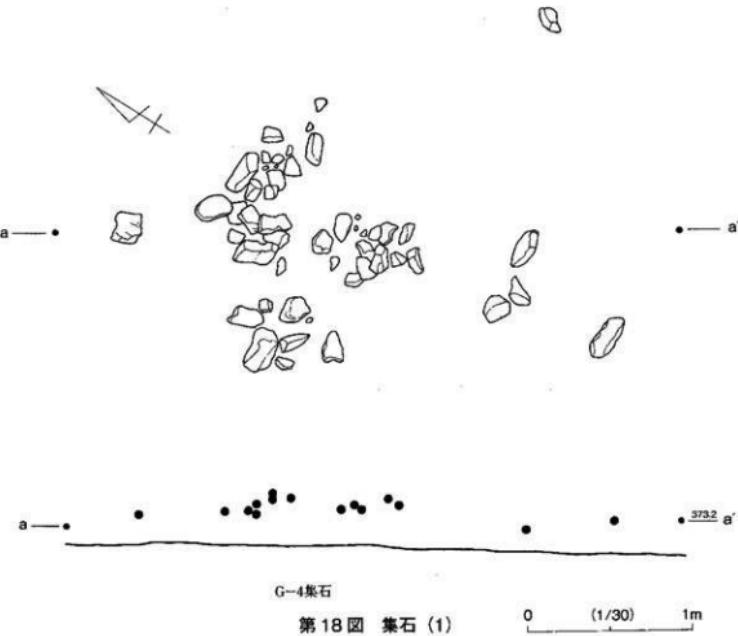
位置 調査区東側（G - 4 区）の緩斜面に位置する。確認面は第III層中で、G - 4 竪穴の上位にあたる。

形状・規模 磨が 180cm × 150cm の範囲内に集中し、周囲に拡散していた。垂直分布は概ね 20cm 幅に収まる。掘り込みは確認できなかった。砾は細片から 15cm 大がほとんどで、30cm 大も数点含まれる。明瞭な被熱痕は見られなかった。

遺物 早期条痕文系土器 1 点、土師器 1 点が出土した。いずれも細片であった。



第17図 土坑 (3)



第18図 集石 (1)

I-20 集石 (第19図)

- 位置 調査区西側 (I-19・20区) の緩斜面に位置する。I-20 土坑と重複するが新旧関係は不明である。確認面は第IV層中である。
- 形状・規模 耕作による搅乱を受け、遺存状況は悪い。平面円形基調の掘り込みを伴う。掘り込みは東西130cm、最深50cmを測る。底面は第V層中に構築されている。
- 覆土 2層を確認した。第1層は黒褐色土で多量の礫やローム塊 (1cm~3cm) を含む。第2層は暗褐色土で炭粒を少量含む。
- 礫 大きさは細片から15cm程度で、大半が破損していた。一部に赤化や吸炭などの被熱痕が見られた。
- 遺物 なし。

J-16 集石 (第19図、図版9)

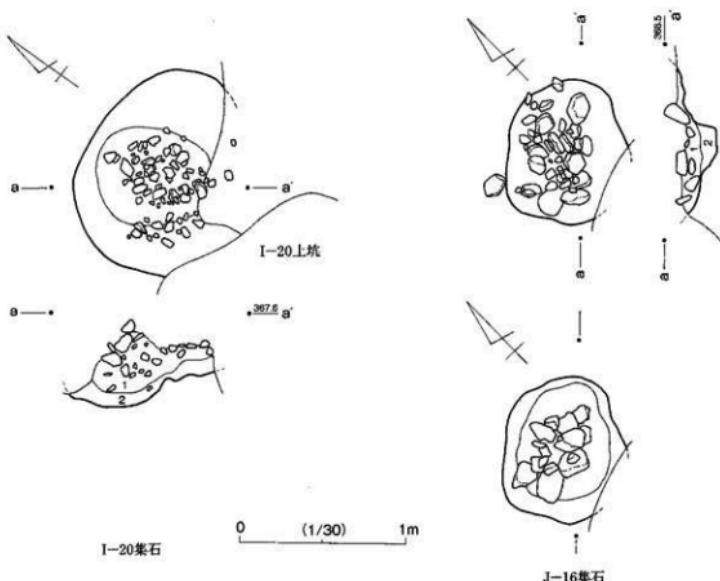
- 位置 調査区西側 (J-16・17区) の緩斜面に位置する。確認面は第III層中である。
- 形状・規模 平面不整楕円形の掘り込みを伴う。掘り込みは長軸180cm・短軸150cm、最深50cmを測る。底面は第IV層中に構築され、断面は皿状で中央部が一段深くなる。
- 覆土 2層を確認した。
- 礫 比較的大型の礫を底面に配したうえで大小の礫が集積されていた。大きさは細片から20cm程度で、大半が破損していた。一部に赤化や吸炭などの被熱痕が見られた。
- 遺物 なし。

(8) 遺物集中部

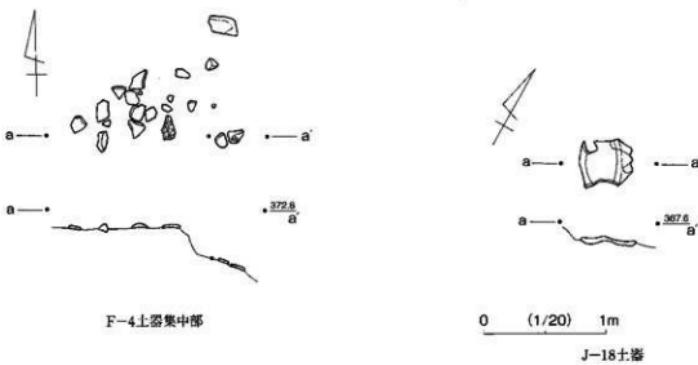
- F-4 土器集中部 (第20図~21図、図版15)
- 位置 調査区東側 (F-4区) の緩斜面に位置し、G-4 竪穴の南側5m地点にあたる。確認面は第III層中である。
- 出土状況 主に深鉢1個体の破片が斜面に沿って分布し、範囲は80cm×30cmである (第21図1~5)。
1~4は同一個体と思われる。胴上半部に格子状の斜交条痕文を施し、下端の一部を横位の条痕文で区画する。内面は撫でによる擦痕が横位に残る。胎土は微量の纖維、スコリア、微細な金・黒雲母を含む。色調は赤褐色、にぶい褐色で、焼成はやや不良である。第II群第4類に該当する。
5は無文の纖維土器で、砂礫を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。第II群第9類に該当する。

J-18 土器 (第20図~21図、図版15)

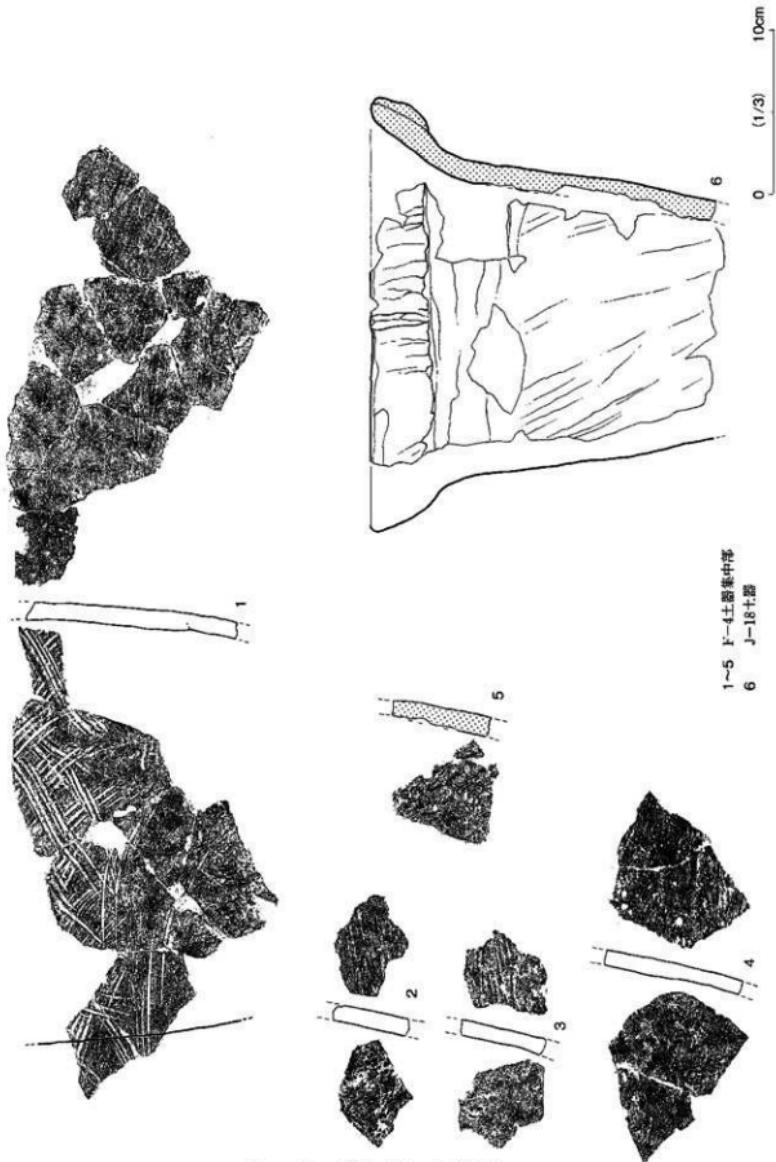
- 位置 調査区西側 (J-18区) の緩斜面に位置し、K-18住の南側2.5m地点にあたる。確認面は第III層下位である。
- 出土状況 深鉢1個体の大きな破片が内面を上にした状態で出土した (第21図6)。口径推定26cm、残存高21cm。器壁は1.5cmを測り、厚手の作りである。口縁部は段を有し、縦位の貼付文が付く。口唇部は丁寧に磨かれる。全体に撫で仕上げされ、口縁部は縦方向、胴上半部は横方向に擦痕が残る。胴下半部は斜位の条痕文を磨り消し、一部に条痕が残る。胎土は多量の纖維を含み、太い纖維束の跡も残されている。この他に金雲母、石英、砂礫を多く含む。色調は暗褐色で、焼成はやや不良である。胎土は脆く、内面の剥落が目立つ。第II群第6類。



第19図 集石 (2)



第20図 土器集中部



第21図 土器集中部の出土遺物

(9) 遺構外出土遺物

① 土器

遺跡から出土した土器は総数 370 点で、このうち遺構外で 357 点出土した。出土層位は第Ⅲ層が中心となる。遺構外の土器分布は調査区の東西に分かれ、縄文時代の遺構分布と重複している。時期は縄文時代早期から後期にわたるが、主体は早期後半から前期で占められる。

第Ⅰ群 早期中葉、沈線文系土器群（第 22 図 1・2、図版 16）。第 2 類土器は遺構外で未確認である。

第 1 類 平行沈線文と短沈線文が施されるもの（1・2）。

口縁部の断面は三角形状となる。口縁部に短沈線文が V 字状に施される。平行沈線間に短沈線文が刻み目状に加えられる。胎土に砂礫を含む。色調は褐色、暗褐色。硬質で焼成は良い。K-20 区Ⅲ層出土。田戸上層式に比定される。

第Ⅱ群 早期後半、条痕文系土器群（第 22 図 3～第 24 図 56、図版 16・17）。第 5 類・6 類土器は遺構外で未確認である。

第 1 類 沈線文と押引文が三角形状の区画で施されるもの（3・4）。

胴部が 2 段にくびれる深鉢形土器で波状口縁となる。1 段目の無文帯を挟んで上下に文様帯を配し、沈線文の交差部に円形刺突文を加える。口唇部の外面に刻み。内面は横位の条痕文が施される。胎土に纖維、金・黒雲母、石英、砂礫を含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。3、E-8 区、4、D-8 区出土。

第 2 類 沈線文が施されるもの（5）。

平行沈線を縱・斜位に施文後、下端を横位の沈線文で区画する。沈線は浅く、内部に細かな筋が残る。条痕文はない。胎土に纖維、石英を多く含む。色調は暗褐色で、焼成はやや不良である。G-4 区Ⅲ層上面出土。

第 3 類 絡条体压痕文が施されるもの（6）。

横位の絡条体压痕文が列点状に施される。条痕文ではなく、内面に横位の擦痕が残る。胎土に纖維、スコリア、石英を含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。G-5 区出土。

第 4 類 貝殻腹縁文や斜交条痕文が施される土器を一括した（7～17）。

7 は口唇部、隆帶、突起に貝殻の押捺が連続して加えられる。口縁部の外面に斜交条痕文、内面に横位の擦痕が残る。胎土に石英、黒雲母、スコリアを含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。I-10 区出土。

8～10 は、隆帶状に張り出した口唇部の外面と突起部に棒状具による刻みが加えられる。口唇部上面と突起側面に条痕文、口縁部外面に斜交条痕文が施される。内面は撫で仕上げのため条痕文が磨り消され、一部に横位の条痕文が残る。胎土に石英、スコリアを含む。色調は暗褐色で、焼成はやや不良。H-9 区・10 区出土。

11 は口唇部の外面に扁平な隆帶が付き、口唇部上面とともに棒状具による刻みが加えられる。口縁部外面は斜交条痕文を地文として、山形の貝殻腹縁文を 2～3 段施す。内面は撫で仕上げのため条痕文が磨り消され、一部に横位の条痕文が残る。胎土に微量の纖維、石英、スコリア、砂礫を含む。色調は赤褐色で、焼成は良い。D-7 区出土。

12・13 は口唇部の外面に扁平な隆帶が付く。隆帶の上端は上につまみあげられたような形である。口唇部は丸く、上面に貝殻腹縁文が施される。外面は無文地で、山形の貝殻腹縁文を 2～3 段施す。内面は不定方向の撫でが認められる。胎土に微量の纖維、スコリア、砂礫を含む。色調は暗灰黄色、黄褐色。焼成は不良で、粗雑な作りである。H-9 区・10 区出土。

14・15 は胴部破片。斜位の条痕文下に山形の貝殻腹縁文を 3 段施す。胴部下半は撫で仕上げのため条痕文

が磨り消され、一部に横位の条痕文が残る。内面は上半部が無文で、下半部は横位の条痕文が施される。胎土に微量の纖維、スコリア、石英を含む。色調は暗褐色で、焼成はやや不良である。H-9区・10区出土。

16は直立気味に立ち上がる口縁部で、口唇部がわずかに外反する。口唇上端は平坦で、7に似た貝殻の押捺が加えられる。口縁外面は横・斜位の条痕文、内面は横位の擦痕が残る。胎土に黒雲母、スコリア、白色粒子を含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。I-18区出土。

17は胴部の破片で、赤褐色を呈する。H-9区出土。

第7類 陸帯が施されるもの (18)。

無文地に横位の陸帯が付けられる。陸帯は扁平で、貝殻背圧痕と思われる刻み目が加えられる。胎土に纖維、雲母、石英、スコリアを含む。色調は暗褐色で、焼成はやや不良である。L-20区出土。

第8類 条痕文が施された胴部の破片を一括した (19~42)。

a種 内外面に施したもの (19~33)。

19~25は、外面に斜・縱位の条痕文が施されるが、浅く不鮮明である。内面は横位の条痕文が施される。胎土に纖維や微細な金雲母を多く含む他、黒雲母、石英を含む。外面はにぶい赤褐色、内面はにぶい褐色である。焼成は良い。出土地点はE-7区・8区、D-8区。

26~29は、外面の条痕文は浅く不鮮明で、一部は磨り消される。内面は横位の条痕文である。胎土に少量の纖維、黒雲母、石英、スコリア、砂礫を含み、26・27は1mm以下の白色針状物質を含む。色調は暗褐色、にぶい褐色。焼成はやや不良である。出土地点は、26、G-6区、27、不明、28、F-8区、29、H-4区。

30~33は条痕文が深く明瞭である。施文は斜・縱位に一定だが、32のみ不定方向である。全般に器厚は1cm以上と厚い。胎土に纖維を多く含む他、スコリア、砂礫を含む。色調は赤褐色、にぶい褐色。焼成はやや不良で、器面の剥落が目立つ。出土地点は、30、不明、31、I-10区、32、J-20区、33、J-19区。

b種 外面のみに施したもの (34~42)。

条痕文は、35が細く条線状、41が擦痕状となるが、他は太く明瞭である。胎土は全般に纖維を多く含み、石英、砂礫を含む。32・42は金雲母が多い。焼成はやや不良か良好で、内面は剥落するものが多い。38は胴部が括れており、第二群第1類に属するものであろう。出土地点は、34、H-7区II層、35、G-9区、36、E-6区、37、F-7区、38、J-16区、39、G-5区、40、F-7区、41、H-6区、42、K-22区、J-20区。

第9類 無文の土器を一括した (45~56)。

45は口縁断面が三角形状となる深鉢形土器で、胎土に纖維、金雲母、石英を多く含む。色調は暗褐色を呈する。I-19区出土。46は外反気味に開く口縁部である。47~54は胴部の破片。51は内外間に縱位の擦痕が残り、53・54の外面は縱位の条痕文が磨り消されている。胎土は全般に纖維、金・黒雲母、石英、砂礫を含む。色調は赤褐色(49・50・54)、にぶい褐色(47・48・51・52)、暗褐色(53)で、焼成は概ね良い。出土地点は、46、不明、47、K-19区、48、L-20区、49、不明、50、F-8区、51、I-18区、H-19区、52、I-7区、53、J-20区、54、I-6区。

55・56は金雲母を多量に含む胴部破片で、条痕文の磨り消しが認められる。胎土に大小の金雲母を特徴的に含み、他に纖維、石英、スコリア、砂礫を含んでいる。色調は暗褐色・黒褐色で、焼成は良い。出土地点は、55、G-5区、56、K-20区。

第10類 底部を一括した (43・44)。

43は平底気味で、内外間に条痕文が施される。胎土に纖維、石英、白色粒子が含まれる。色調は赤褐色で、焼成は良い。44は尖底。胎土に纖維、石英、金雲母を多く含む。色調は暗灰色で、焼成はやや不良である。出土地点は、43、E-7区、44、I-21区。

第Ⅲ群 前期前半、胎土に纖維を多く含み縄文等の施される土器群（第24図57～64、図版17）

第1類 摔糸圧痕文を施したもの（57・58）。

口縁上端に沿って2本の摔糸圧痕文が施される。下位に摔糸圧痕や短沈線による菱形文が数段にわたり配され、菱形交差部には蕨手状の摔糸圧痕文が縦一列に3段配される。胎土は纖維やスコリアが多く、金雲母、石英を若干含む。色調はにぶい黄橙色、黄灰色で、焼成はやや不良である。K-19区、L-20区出土。本類は花積下層式に比定される。

第2類 縄文を施したもの（59～64）。

いずれも無節縄文で、59～61は同一個体で羽状縄文と思われる。胎土に多量の纖維や大小（最大5mm程度）の砂礫を含む。色調は赤褐色（59～61）、黄橙色（62）、にぶい褐色（63）、褐灰色（64）。焼成は62が良く、他はやや不良で器面の剥落が目立つ。出土地点は、59・60、K-18区、61、K-20区、62、C-5区、63、不明、64、I-17区。本類は黒浜式に比定される。

第IV群 前期後半の土器群（第24図65～第25図89、図版17）

第1類 連続爪形文を施す（65～72）。地文によって2種に大別した。

a種 地文に縄文が施される（65～69）。縄文はすべて単節RLである。

65～68は器壁が7mmと薄い。幅の狭い半裁竹管で平行沈線文と連続爪形文を横位に施し、地文の縄文と無文帶を区画する。円形刺突文や斜位の平行沈線文が伴う。内面は平滑である。胎土に砂礫、スコリアを含む。色調は概ねにぶい褐色で、焼成は良い。

69は幅の広い連続爪形文を数段に施す。内面はざらつく。胎土に石英、黒・金雲母を含む。色調はにぶい褐色、橙色で、焼成は良い。出土地点はK-20区・21区である。

b種 無文地（70～72）

70・71は内湾気味に開く口縁部で、平行沈線文と連続爪形文を横・斜位に施す。胎土に黒雲母、石英、スコリア、砂礫を含む。色調はにぶい橙色で、焼成は良い。72は胴部に平行沈線と連続爪形文が施される。出土地点は、70、H-8区、71、F-7区、72、E-7区。

第2類 縄文地に平行沈線文や凹形刺突文を施す（73～77）。

口縁から胴上半部に半裁竹管による平行沈線で木の葉状文を描き、円形刺突文を加える。文様内部に地文の縄文を残し、他は磨り消している。縄文は単節RLと思われるが不鮮明である。74・75は胴下半部に単節縄文RLが施され、上端を横位の平行沈線文で区画する。内面は平滑である。胎土に黒・金雲母、石英を含む。色調はにぶい橙色、褐灰色で、焼成は良い。出土地点は、73、I-19区、J-18区・19区・20区、K-20区、74、I-21区、75、J-19区・20区、76、H-19区、77、I-19区。

第3類 平行沈線文を施す（78～84）。

a種 地文に縄文が施される（78～80）。

外反する口縁から胴部にかけて横・斜位の平行沈線文が施され、地文の無節縄文しが一部に残る。内面は平滑である。胎土に砂礫を含む。色調は概ね赤褐色だが、78・79の外面は黒褐色を呈する。焼成は良いが、器面の剥落が目立つ。J-19区出土。

b種 無文地（81～84）。

81～83は、口縁から胴部にかけて横・斜位の平行沈線文が密に施される。口縁部は緩く波状を呈し、口唇部に浅い刻みが連続して加えられる。胎土に黒雲母、白色粒子が含まれる。色調は外面がにぶい褐色、黒褐色、内面は明褐色で、焼成は良い。出土地点は、81、F-6区、H-7区II層、82、C-5区、83、不明。

84 は胴部の破片で、横・斜位の平行沈線文が波状に施される。胎土に黒・金雲母、砂礫を多く含む。色調は外面が黒褐色、内面はにぶい褐色で、焼成は良い。出土地点は不明。

第4類 縄文のみを施す (85～89)。

単節縄文RLが多い。89は底部で無節縄文しが施されるが、施文は浅く不鮮明である。全般に内面は平滑である。胎土に砂粒を含み、88は金雲母、石英を含む。色調は概ねにぶい赤褐色で、焼成は良い。出土地点は、85、不明、86、H-7区II層+C-5区、87、J-22区、88、J-18区、89、J-19区・20区。

本群は諸磯a、b式に比定される。

第V群 中期の土器群 (第25図90～99、図版18)

第1類 半裁竹管による角押文が施されるもの (90)。

隆帶と角押文で横位の楕円区画を配し、区画内部は縦位の角押文を充填する。胎土は砂礫が多い。色調はにぶい赤褐色で、内面は吸炭が見られる。焼成は良い。猪沢式期に比定される。

第2類 ベン先状工具による三角押文が施されるもの (91)。

隆帶とキャビラ文、三角押文により三角形状の区画を配している。胎土に微細な金・黒雲母、砂礫を含む。色調はにぶい赤褐色で、焼成は良い。新道式期に比定される。

第3類 口縁部が無文で、胴部に文様帯を持つ深鉢形土器 (92～94)。

92は内湾する口縁部で、胎土は砂礫が多く含まれる。色調は暗褐色で、焼成は良い。K-19区・21区出土。

93・94は波状沈線で区画した胴部に縦位の縄文を施す。口縁上部に弧状の沈線が施される。胎土は金雲母、石英が多い。色調はにぶい橙色で、外面は黒褐色を呈する。

本類は藤内式期に比定される。

第4類 口縁部が外反する大型の深鉢形土器 (95・96)。

95は口縁部に重弧文、96は口縁が無文で頸部に波状隆帶を巡らす。いずれの胎土にも砂礫、金雲母を含む。色調はにぶい黄褐色で、焼成は良い。曾利I～II式期に比定される。

第5類 条線が施されるもの (97・98)。

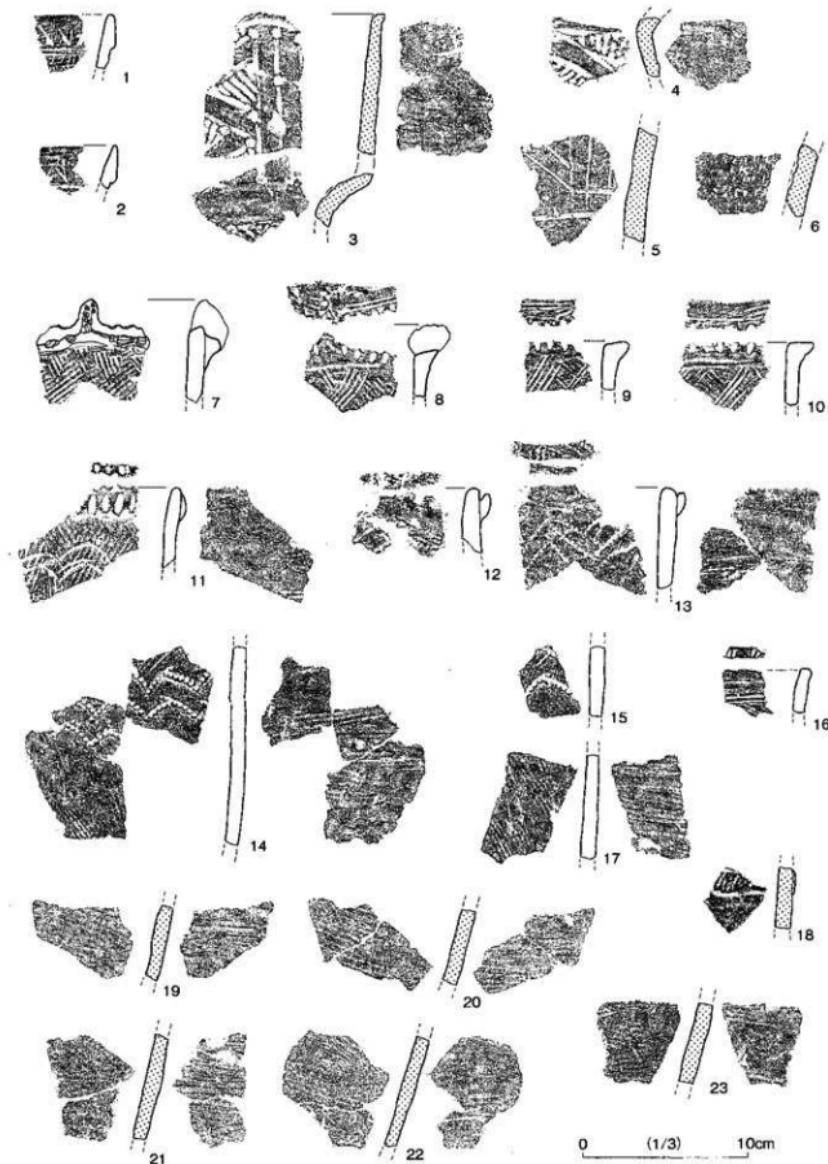
97は口縁部に横位の沈線文を施し、胴部は隆帶による区画内に縦位の条線が施される。98は内湾気味に開く口縁部で、櫛齒状の条線が縦位に施される。いずれの胎土にも黒・金雲母、砂礫を含む。色調はにぶい黄橙色、黒褐色で、焼成は良い。曾利IV～V式期に比定される。

第6類 ハの字状の列点文が施されるもの (99)。

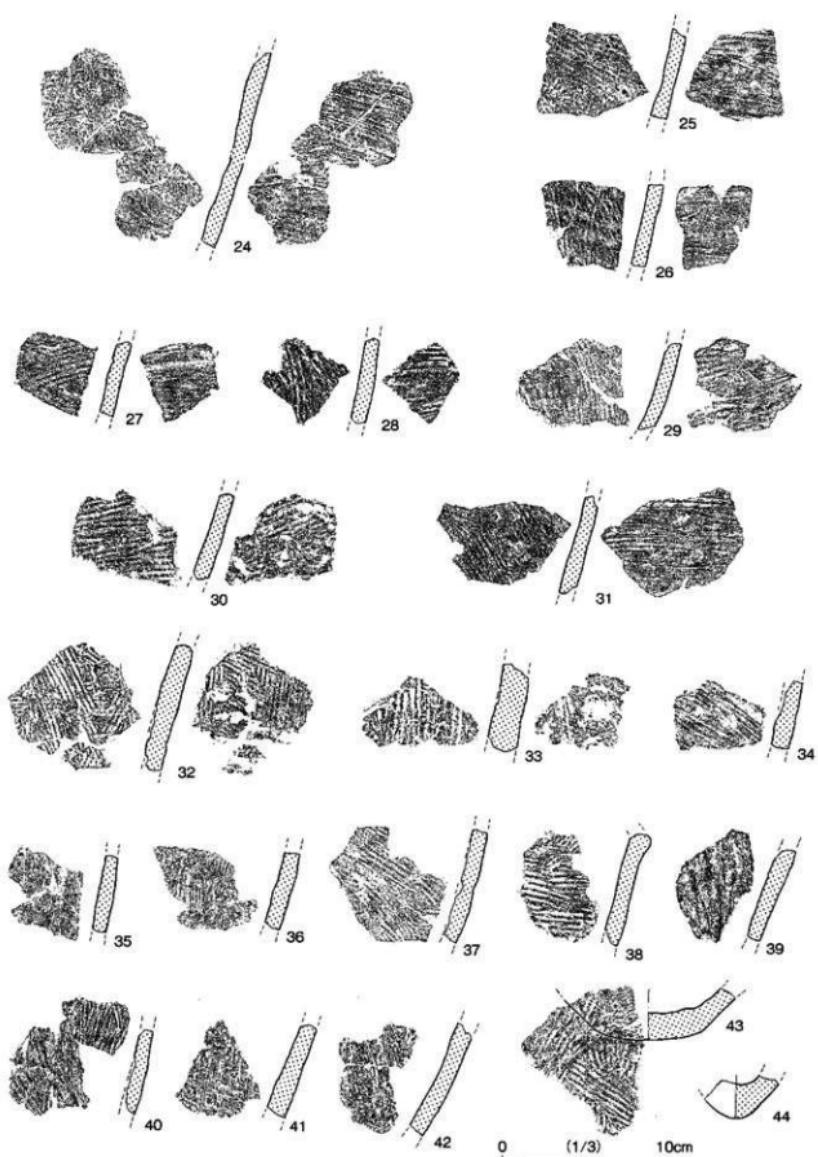
曾利V式期に比定される。

第VI群 後期の土器群 (第25図100～102、図版18)

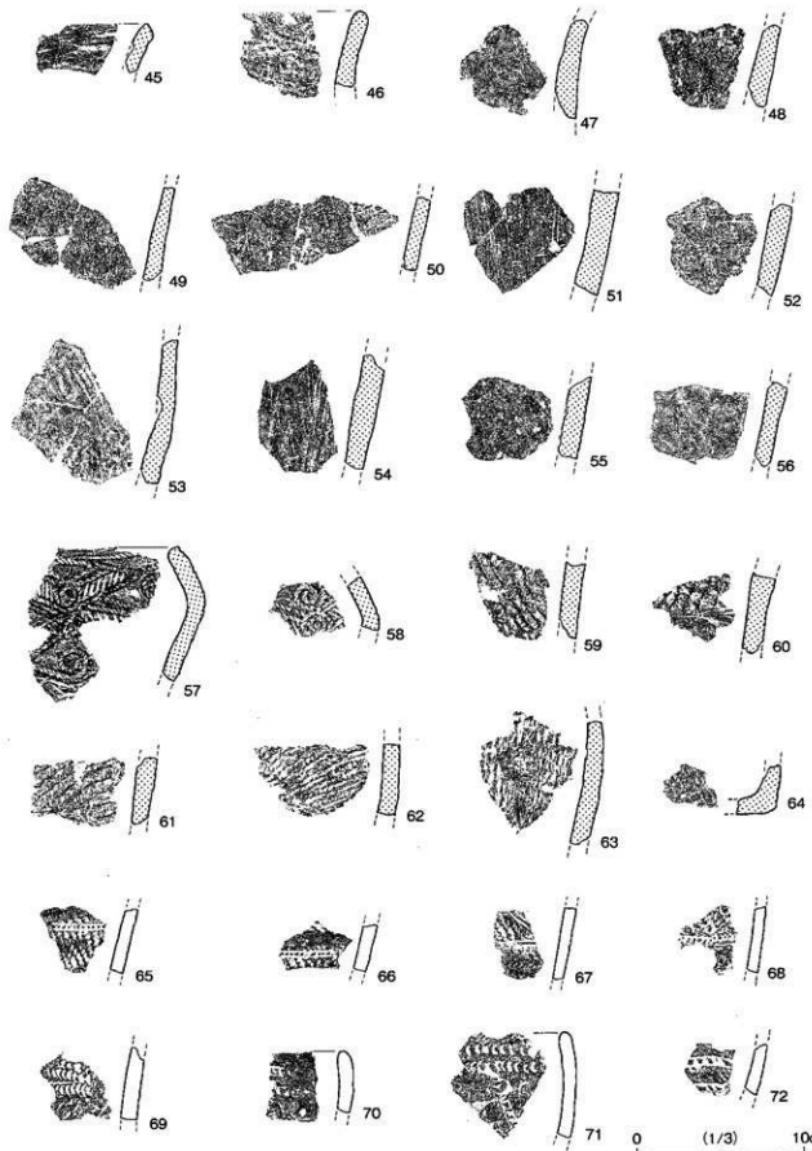
後期の土器を一括した。100・101は沈線文が施された深鉢形土器である。100は胴部に縦位の沈線文が施される。胎土は砂礫が多い。色調は赤褐色で、焼成は良い。称名寺式末～堀之内式期に比定される。101は張りを持つ胴部に平行沈線文が施される。胎土に砂礫、金雲母を含む。色調はにぶい橙色で、焼成は良い。堀之内式に比定される。102は深鉢底部で網代痕が見られる。胎土に砂礫、金雲母を含む。色調は暗褐色で、焼成は良い。堀之内式に比定される。



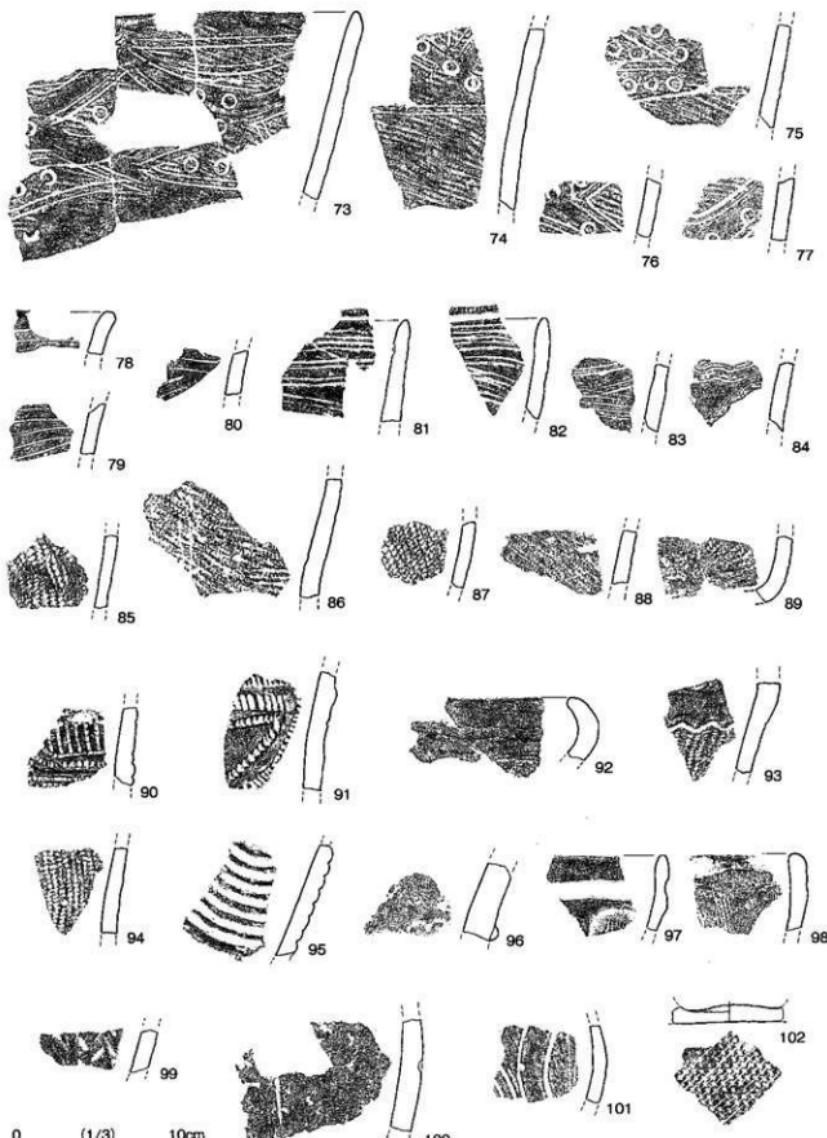
第22図 遺構外の縄文土器 (1)



第23図 遺構外の縄文土器 (2)



第24図 遺構外の縄文土器 (3)



第25図 遺構外の縄文土器 (4)



第26図 繩文土器分布図、接合図

②石器

遺跡から出土した石器は総数 87 点で、遺構外が大半を占める。器種は石鎌及び未成品、楔形石器、加工痕や使用痕のある剝片、石核、スクレイパー、石匙、打製石斧、礫器及び未成品、横刃形石器、凹石、磨石類、石皿・台石があり、他に黒曜石やチャートの剝片が多数出土した。出土層位は第Ⅲ層を中心とする。遺構外の石器分布は調査区の東西に分かれ、縄文時代の遺構・遺物の分布範囲と重複している（第 33 図）。

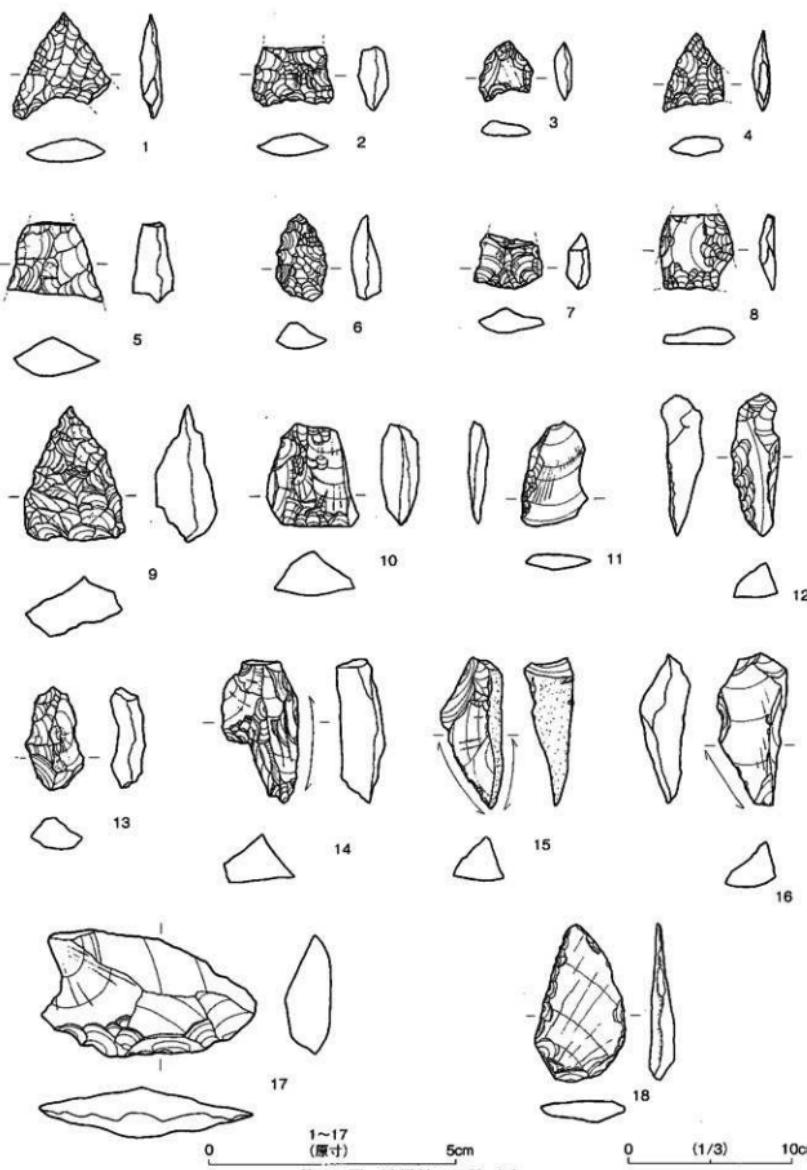
剝片は遺構外で 97 点出土し、7 割近くが調査区西側の J - 20 区と J - 20 落ち込みの出土数で占められる。石質は黒曜石 52 点、チャート 38 点、頁岩 6 点、凝灰岩 1 点である。他に K - 18 住で 7 点、J - 20 落ち込みで 55 点が出土した。

図No.	出土遺構・地区	整理No.	器種	石材	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
第7図3	K-18住	2	打製石斧	ホルンフェルス(泥岩)	19	11.5	7.5	1450
第7図4	K-18住	31床底	スクレイパー	頁岩	4.8	3.6	0.9	17.6
第7図5	K-18住	14	石匙	チャート	4.6	3	0.5	8.3
第7図6	K-18住	29	使用痕ある剝片	チャート	5.3	3.7	1.3	27.9
第7図7	K-18住	32床底	石核	黒曜石	5.1	4.9	2.5	73.4
第8図2	I-20整穴	床直	打製石斧	砂岩	14	8.4	4.4	630
第8図3	I-20整穴	床直	凹石	泥質片岩	15.5	8.5	5.3	1150
第27図1	I-19区	368	石鎌	チャート	2.2	(2)	0.3	1
第27図2		277	石鎌	黒曜石	(1.2)	1.6	0.5	0.95
第27図3	J-20区Ⅲ層	618	石鎌	黒曜石	1.2	1.1	0.3	0.3
第27図4	I-20区	372	石鎌	黒曜石	1.6	(1.2)	0.3	0.45
第27図5			石鎌	チャート	(1.6)	(1.9)	0.8	2.4
第27図6	J-19区	344	石鎌(未成品)	黒曜石	1.7	1	0.5	0.75
第27図7	G-17区	398	石鎌(未成品)	黒曜石	1.1	1.4	0.4	0.6
第27図8	F-6区	84	石鎌(未成品)	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.95
第27図9	J-20区Ⅲ層	616	石鎌(未成品)	チャート	2.7	2	0.9	5.2
第27図10	E-5区	54	楔形石器	チャート	2.1	1.7	0.8	2.95
第27図11		282	加工痕ある剝片	黒曜石	2.1	1.3	0.2	0.6
第27図12	28トレンチ(J-20区)		加工痕ある剝片	黒曜石	2.9	0.9	0.6	1.4
第27図13	J-19区	347	加工痕ある剝片	黒曜石	2.1	1.1	0.5	1.25
第27図14			使用痕ある剝片	黒曜石	3	1.5	0.8	3.15
第27図15	C-4区	407	使用痕ある剝片	黒曜石	3	1.2	0.9	2.2
第27図16		278	使用痕ある剝片	黒曜石	3.1	1.3	0.8	3.1
第27図17	J-20区Ⅲ層	635	スクレイパー	砂岩	4.4	2.5	0.9	9.3
第27図18			打製石斧	砂岩	9.6	5.5	1.3	70
第28図19	K-20区	295	打製石斧	砂岩	13.3	4.3	1.8	135
第28図20			打製石斧	砂岩	12.5	5.3	1.1	110
第28図21	28トレンチⅢ層(J-20区)		打製石斧	砂岩	12.3	7.3	2	160
第28図22	I-6区	190	打製石斧	砂岩	12.5	8.9	2.7	390
第28図23	E-8区	108	打製石斧	砂岩	17.2	8.3	2.2	350
第28図24	J-18区	488	打製石斧	砂岩	14	9.5	2.5	395
第28図25	I-17区	472	打製石斧	砂岩	(12)	8	2.5	260
第28図26	F-4区	34	打製石斧	砂岩	9.2	(6.7)	3	195
第28図27		280	打製石斧	ホルンフェルス(泥岩)	9.7	(6.7)	2.4	190
第28図28	I-6区	185	礫器	砂岩	8.8	7	2.2	160
第29図29	K-19区	337	礫器	砂岩	10	9.5	2.9	230
第29図30			礫器	砂岩	10.5	8.1	3	360
第29図31			礫器	凝灰質砂岩	11	11	4.1	610

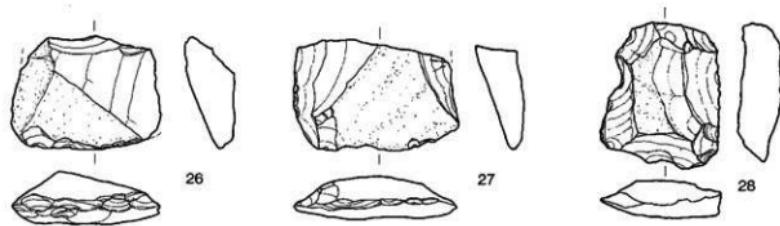
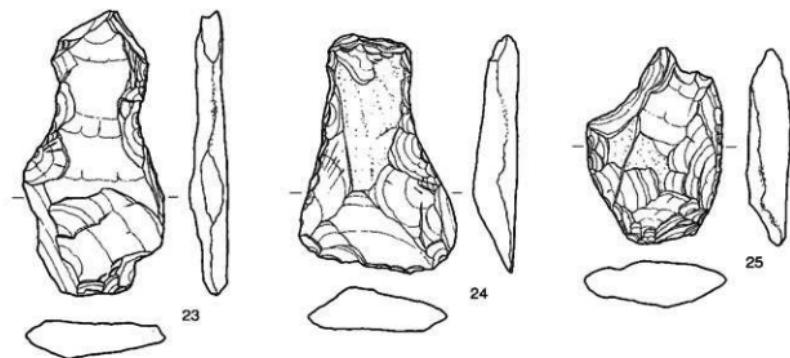
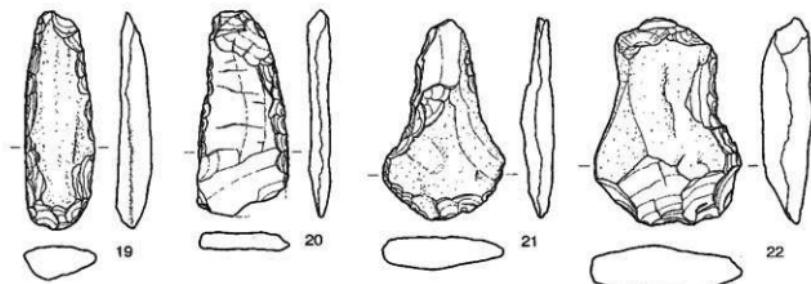
石器一覧表 (1)

図No	出土遺構・地区	整理No	器種	石材	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
第29図32	K-18区	500	礫器	砂岩	13	10.8	4.8	770
第29図33	K-18区Ⅲ層		礫器	砂岩	13	8.3	4.6	460
第29図34	J-20区	319	礫器	凝灰岩	14.7	10.8	4.7	940
第29図35	J-20区	317	礫器未成品	粗粒砂岩	11	10.8	4.7	565
第29図36			礫器未成品	凝灰岩	10.6	6	4.9	445
第30図37			横刃形石器	ホルンフェルス(泥岩)	10.5	5.9	2.3	130
第30図38	K-19区Ⅲ層		礫器未成品	ホルンフェルス(泥質砂岩)	15	11.5	4	690
第30図39	J-18区(住居付近)	図76-1	横刃形石器	ホルンフェルス(泥岩)	9.7	5.2	1.2	80
第30図40	G-6区Ⅲ層		凹石	砂岩	9.5	4.1	1.5	61
第30図41	K-19区Ⅲ層		凹石	泥質片岩	9.8	4.7	2.8	210
第30図42			凹石	泥質片岩	9.5	5	2.7	185
第30図43	D-6区Ⅲ層		凹石	泥質片岩	7.5	5	3.6	160
第30図44			凹石	泥質片岩	12.5	5.3	2.4	225
第30図45	J-21区Ⅲ層		凹石	泥質片岩	12.1	3.9	3.4	212
第30図46			凹石	泥質片岩	10.5	7.5	6.2	635
第30図47			凹石	砂岩	10	8.4	3.2	400
第30図48			凹石	泥質片岩	7.3	6.8	2.1	125
第30図49	F-8区	138	凹石	泥質片岩	9.2	4.8	2.7	195
第30図50		143	凹石	泥質片岩	17	16	7	2700
第31図51	H-7区Ⅲ層		凹石	砂岩	8.5	6.5	3.5	275
第31図52	H-7区Ⅲ層		凹石	砂岩	11.2	5.5	2.5	250
第31図53	30トレンチⅢ層(L-18区)		凹石	泥質片岩	11.4	5.3	2.7	260
第31図54	J-20区		凹石	泥質片岩	11	10	3	460
第31図55	D-8区Ⅲ層		凹石	泥質片岩	11	10.1	4.7	765
第31図56	I-17区Ⅲ層		凹石	砂岩	10	6.9	3.9	450
第31図57			磨石類	石英閃綠岩	(6)	(8)	3.5	245
第31図58	F-5区	82	磨石類	石英閃綠岩	8.5	6.6	4.1	355
第31図59	I-8区	179	磨石類	石英閃綠岩	(5.5)	7.2	4.2	220
第31図60	E-8区	113	磨石類	粗粒砂岩	(4.9)	7.5	4	190
第31図61		29	磨石類	デイサイト	(6.0)	8.8	3.4	310
第32図62		34	磨石類	安山岩	(5.5)	7.5	3.1	215
第32図63	7トレンチⅢ層(F-4区)		磨石類	石英閃綠岩	8	7	3.4	330
第32図64	G-8区	146	磨石類	ひん巻	8	7	4.5	410
第32図65	F-6区	73	磨石類	デイサイト	11.7	5	5.2	595
第32図66	D-7区	435	磨石類	砂岩	(7.5)	4.2	3	170
第32図67	H-20区	376	台石・石皿	玄武岩	(14)	(8.5)	6	815
第32図68	D-8区	426	台石・石皿	玄武岩	(12.5)	(12)	7	1375
第32図69	F-6区	74	台石・石皿	安山岩	(12.5)	(8)	4.9	625
第32図70	H-16区	440	台石・石皿	玄武岩	(18.5)	18.5	5.2	2950
71	F-6区	69	台石・石皿	石英閃綠岩	(7.5)	(7.5)	3.2	295
72	G-7区	154	台石・石皿	石英閃綠岩	(9.5)	(7)	5	460
73	I-8区	170	台石・石皿	石英閃綠岩	(10.2)	(9.4)	4.5	860
第39図5	J-20落ち込み覆土		石錐	黒耀石	1	1	0.2	0.2
第39図6	J-20落ち込み覆土		石錐	黒耀石	1.4	1.2	0.3	0.45
第39図7	J-20落ち込み覆土		石錐	チャート	1.9	1.6	0.5	1.5
第39図8	J-20落ち込み覆土		石錐(未成品)	チャート	2	1.1	0.4	0.75
第39図9	J-20落ち込み覆土		石錐(未成品)	黒耀石	1.5	1.2	0.4	0.6
第39図10	J-20落ち込み覆土		打製石斧	ホルンフェルス(泥岩)	(6.0)	4.4	1.3	60
第39図11	J-20落ち込み覆土		磨石類	花崗岩	(6.0)	(4.7)	(3.7)	150

石器一覧表(2)

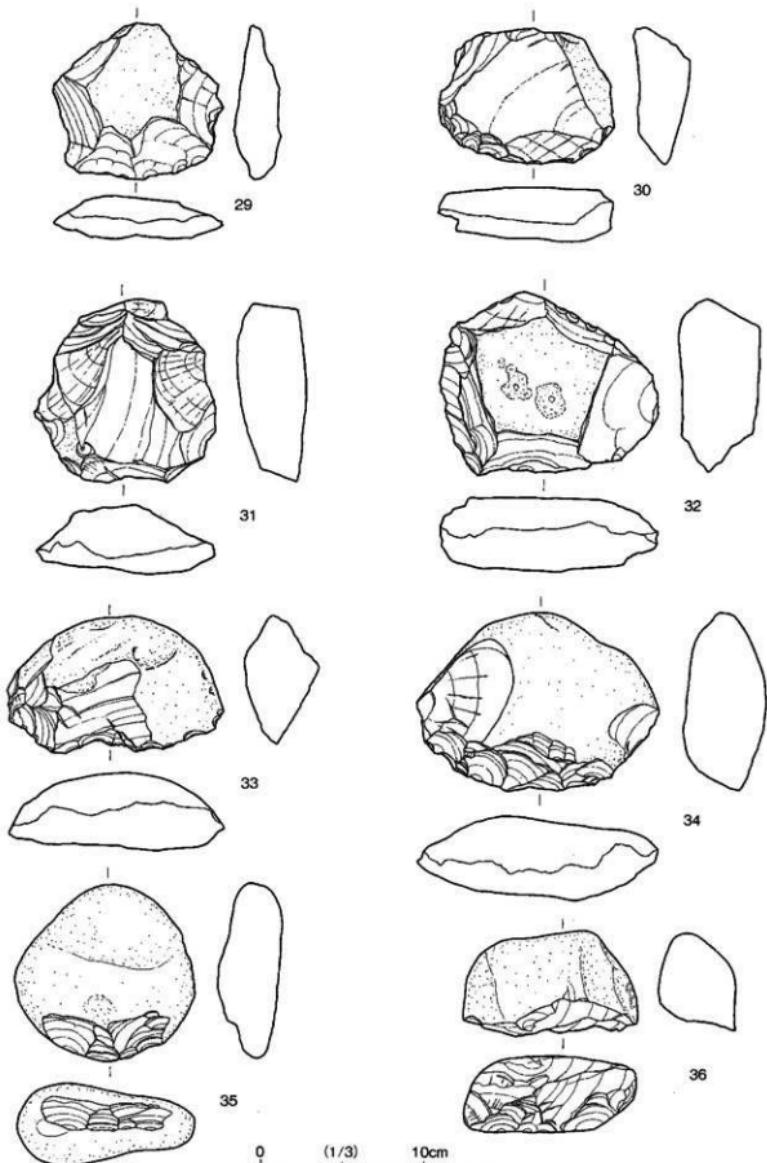


第27図 遺構外の石器 (1)

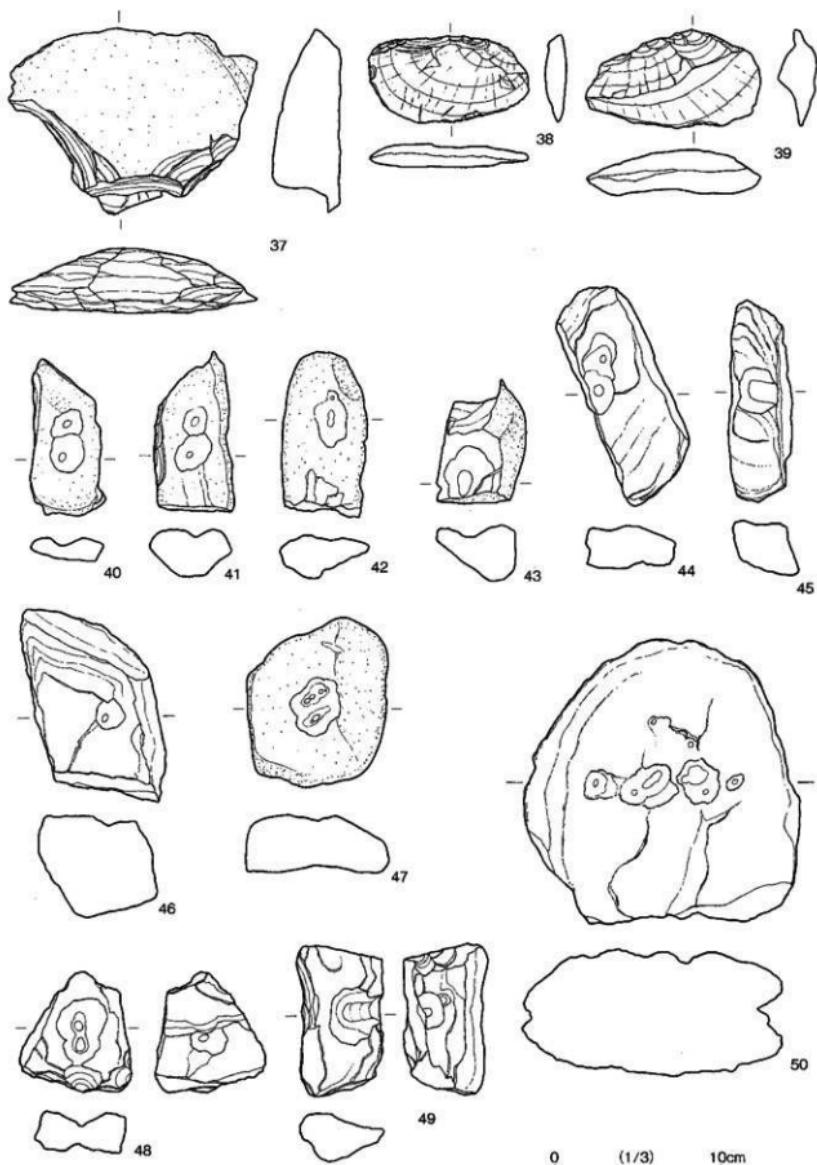


第28図 遺構外の石器(2)

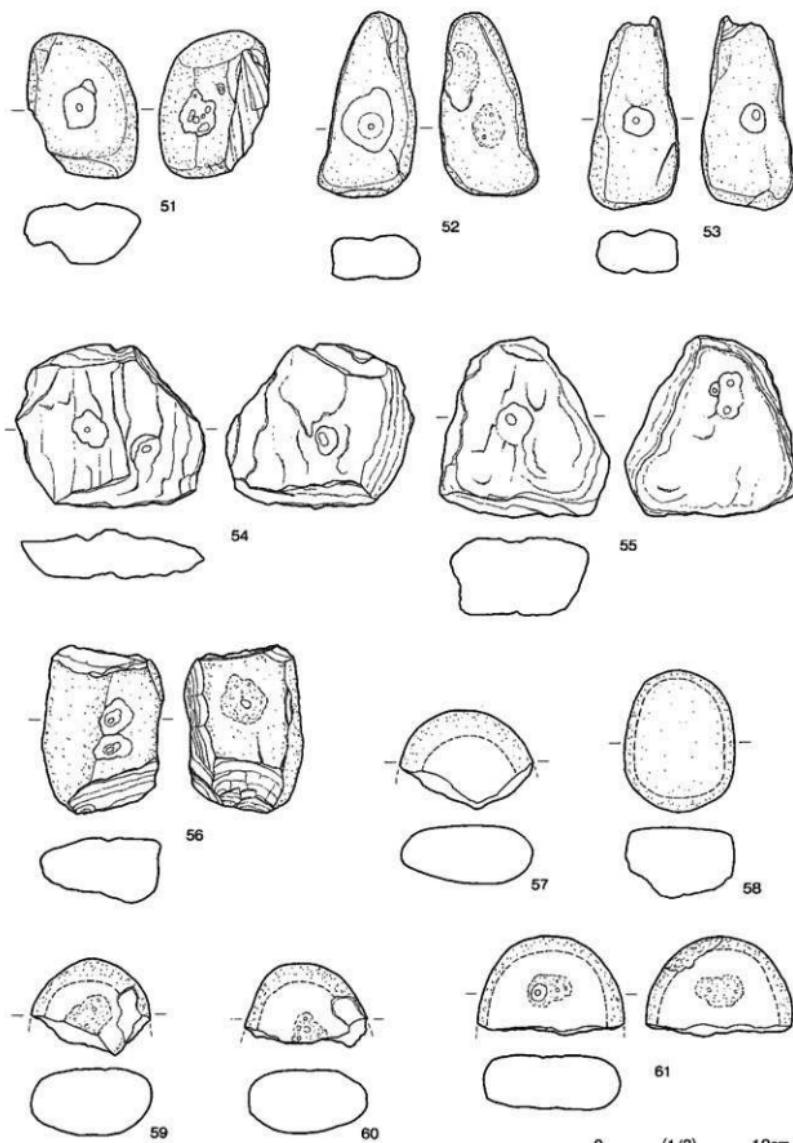
0 (1/3) 10cm



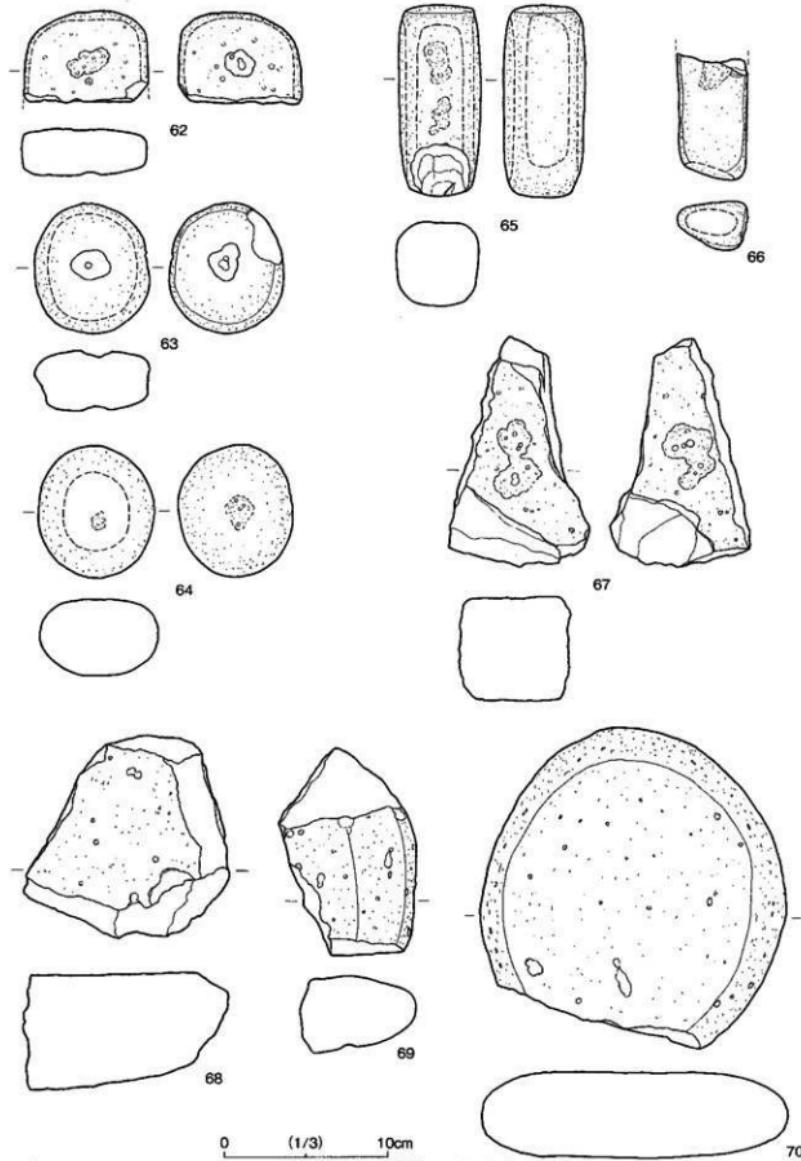
第29図 遺構外の石器 (3)



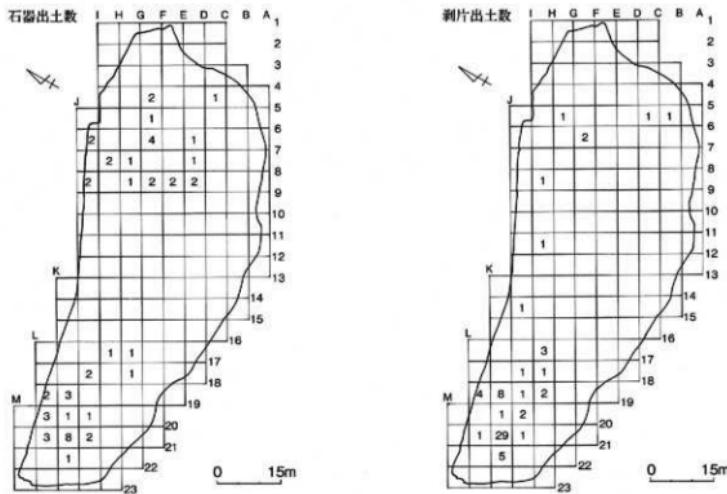
第30図 遺構外の石器 (4)



第31図 遺構外の石器 (5)



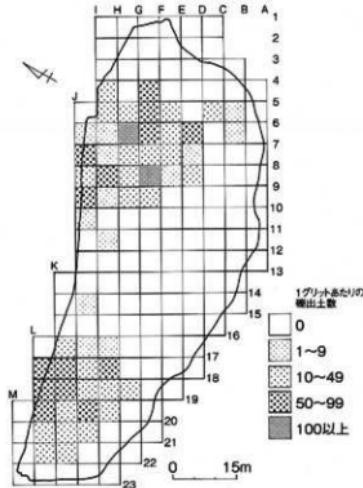
第32図 遺構外の石器 (6)



第33図 石器分布図

(10) 磁

遺構外で多量の磁が出土した（第34図）。磁の総数は2,678点、総重量495.8kgであった。分布は調査区の東西に分かれ、大半が第Ⅲ層で出土した。遺構・遺物の分布と重なるものである。磁の大半は遺跡周辺の地山に由来する泥質片岩や砂岩系で、大きさは細かな碎片から最大40cmまで様々だが、拳大から20cm大が中心となる。破損率は高く、顯著に赤化した磁や黒色付着物（煤・タール）を有するなど被熱痕が認められるものは全体の2割程度であった。



第34図 磁の分布状況

第2節 古代

古代の遺構は土坑1基、焼上塗1基が調査区の西側で検出された（第35図）。遺物は土師器、須恵器の破片が出土し、I-17土坑の南側に集中部が見られる。出土層位は第II層から第III層上位である。土師器は奈良時代から平安時代前期に比定され、相模型や武藏型の甕が多い。

(1) 土坑

I-17土坑（第36図、図版10）

位置 調査区西側（I-17区）の緩斜面に位置し、

確認面は第III層中である。

形状・規模 平面は不整円形で、長軸75cm・短軸65cm、

深さ12cmを測る。底面は第III層中に構築され、ほぼ平坦である。

覆土 黒褐色土が主体で、3層に分けられる。

遺物 なし。

(2) 焼土塗

I-16焼土塗（第36図、図版10）

位置 調査区西側（I-16区）の緩斜面に位置し、

確認面は第II層中である。

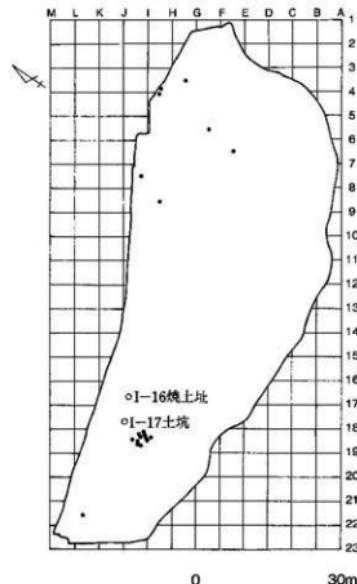
形状・規模 挖り込みを有するが、一部掘り過ぎのため欠けている。掘り込みは平面不整円形で、長軸75cm・短軸の残存長49cm、深さ10cmを測る。底面は第III層中に構築され、ほぼ平坦である。地山の焼土化は見られなかった。

覆土 焼土粒・塊、炭化粒を多く含む。

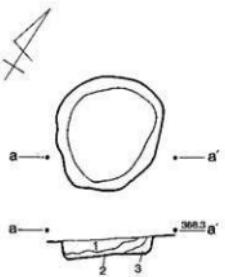
遺物 なし。

(3) 遺構外出土遺物（第37図）

土師器30点、須恵器2点が出土した。細片が多い。1～4は薄手（器厚3mm～4mm）甕で胴部にハケ目。2は外面に縦位、3～4は内面に横位のハケ目。胎土は砂粒を含む。色調は橙色、にぶい褐色で、焼成は良い。5、甕の胴部。器厚4mm～5mm。外面に縦・横位のヘラ削り、内面は横位のヘラ撫で。胎土は砂粒、微細な金雲母を含む。色調はにぶい褐色で、焼成は良い。6、須恵器の甕。平行叩き目。色調は灰色で、焼成は良い。

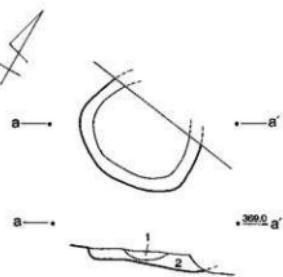


第35図 古代の遺構・遺物分布図



- 1 黒褐色土 第Ⅲ層に似る。炭化粒・赤色スコリア非常に多く含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒・赤色スコリア少量含む。
- 3 暗褐色土 黄色土粒多い。

I-17土坑

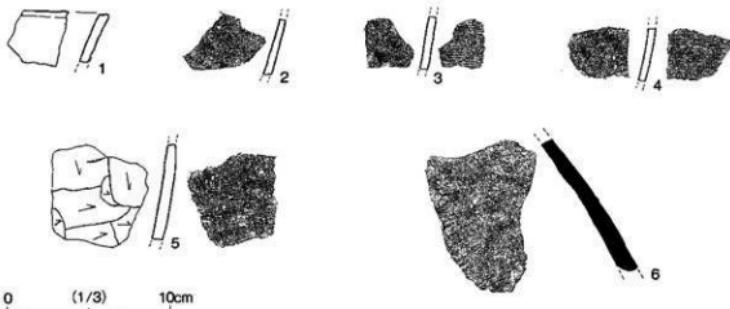


- 1 暗赤褐色土 焼土塊・炭化粒多い。
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化粒多い。
第Ⅱ層土を塊状に多く含む。

0 (1/30) 1m

I-16焼土址

第36図 I-17土坑、I-16焼土址



第37図 出土土器

第3節 落ち込み（風倒木痕）

今回の調査では第Ⅲ層から第Ⅳ層におけるプラン確認の段階で、地山のローム層や黒色土が再堆積した部分が11ヶ所で確認された。平面は不整形で、長軸規模は2mから6m程度まで様々である。分布は調査区中央部から東寄りと西端に偏在する（第4図）。このうち西端の2ヶ所を検出した。

落ち込みは基本土層の第Ⅱ層あるいは第Ⅲ層から大きく陥没し、底面はローム層まで達している。覆土は、ロームの再堆積土を中心と第Ⅱ層あるいは第Ⅲ層の再堆積土や混合土が取り巻く。壁から底面の境は不明瞭で、底面に不規則な凹凸が認められる。遺物は覆土中から縄文土器の破片や石器及び剝片が出土した。

他の遺構と覆土・形状等が明確に異なるため、本書ではいわゆる風倒木痕を念頭に置いた自然の落ち込みとして報告する。落ち込みの形成時期は第Ⅱ層あるいは第Ⅲ層の堆積後と考えられ、出土遺物は第Ⅲ層中に含まれていたものが流入した可能性が強いものと思われる。

J-20 落ち込み（第38・39図、図版11・15）

位置 調査区西側（J-20区、K-20区）の緩斜面に位置する。南東約5mにI-20竪穴がある。

確認面は第Ⅳ層中である。

形状・規模 平面は東側が張り出した不整橢円形で、長軸340cm・短軸210cm、最深50cmを測る。底面は鍋底状を呈する。

覆土 再堆積ロームを取り巻くように第Ⅲ層の再堆積土や混合土が検出された。

遺物 土器19点、石器7点、黒曜石やチャートの剥片55点、礫22点が覆土中から出土した（第39図）。

1は無文の織維土器である。第Ⅱ群第9類。色調はにぶい褐色で、焼成はやや不良である。2は金雲母を多く含む無文の織維土器である。第Ⅱ群第9類。3は縄文地に竹箒文を持つ土器である。第Ⅳ群第2類。4は単節縄文LRが施される。第Ⅳ群第4類。3・4は諸磯a、b式に比定される。

5～7は石鏃、8・9は石鏃木成品、10は打製石斧、11は磨石類である。

K-20 落ち込み（第38・39図、図版12・15）

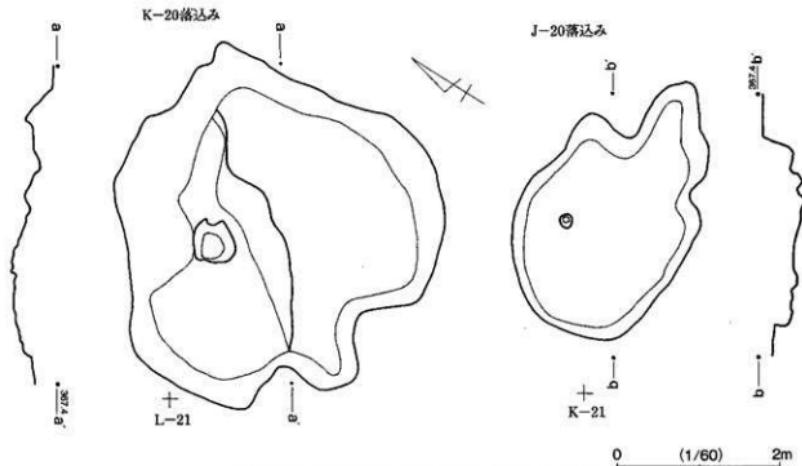
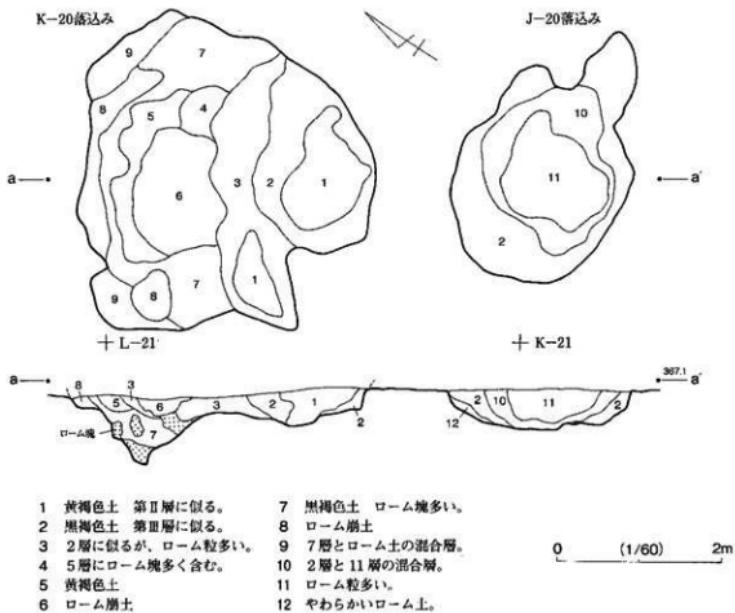
位置 調査区西側（K-20区）の緩斜面に位置する。確認面は第Ⅳ層中である。

形状・規模 平面は不整形で、長軸400cm・短軸350cm、最深80cmを測る。底面は凹凸が見られ、北西側が一段深くなる。

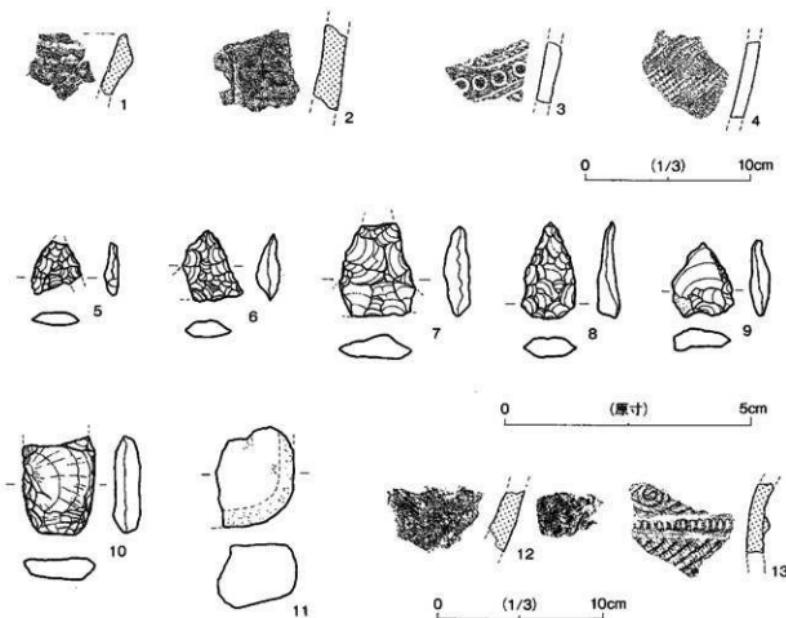
覆土 ロームや第Ⅱ層の再堆積土を取り巻くように第Ⅲ層の再堆積土や混合土が検出された。

遺物 土器2点、礫6点が覆土中から出土した（第39図）。12は外外面に条痕文が施された土器である。

色調は褐色で、焼成は良い。第Ⅱ群第8類。13は刻みが加えられた隆帯を境に、上部に蕨手状の燃糸圧痕文、下部に単節縄文LRが施される。第Ⅲ群第1類で、花穂下層式に比定される。



第38図 落ち込み 覆土平面・断面図、実掘



1~11 J-20落ち込み
12~13 K-20落ち込み

第39図 落ち込み 出土遺物

第IV章 まとめ

丘陵の先端部を発掘調査した結果、縄文時代早期後半を中心とする遺構や遺物が調査区の東西に検出された。東側では竪穴住居や竪穴状遺構、環状ピット列、炉穴が近接あるいは重複し、周囲に落し穴等の土坑や炉穴が散在していた。西側では竪穴住居と竪穴状遺構が距離をおいて立地し、これらと一部混在しながら落し穴等の土坑や焼土が周囲に分布していた。東西の遺構群は北側の平坦地に統一、同一集落を構成するものと思われる。

竪穴住居はいずれも平面方形基調で炉を持ち、主軸方位がほぼ一致する。竪穴状遺構は平面不整形形で炉を持たない。炉穴は単独のものと複数重複するものがあり、いずれも長軸が描い齊一性が認められる。炉穴は一般に食物調理など火熱を必要とする施設と考えられており、市内の仲大地遺跡を始め縄文早期後半の集落址で竪穴住居や竪穴状遺構と近接して分布する方が知られている。本遺跡の炉穴も竪穴群と重複しながら周囲を取り巻くように分布しており、竪穴住居や竪穴状遺構と相互に補完しあい一定の居住機能を果たしていたことが想定される。環状ピット列は平面規模や位置関係から竪穴状遺構との関連が考えられるが、性格不明である。これらの詳細な時期は不明確だが、周辺で第II群土器が多く出土し、遺構内からもわずかに出土したことから縄文時代早期後半に位置付けられる。ただし、集石は上層で確認されたため前期以降に属するものであろう。

出土上器は縄文時代早期中葉から後期前半に属し、主体は第II群土器が占める。第II群は早期後半の条痕文系土器群を一括したもので10類に分けた。第1類は鶴ヶ島台式に比定される。第2類は文様モチーフが第1類に類似するが、具体的な形式は不明である。第3類は絡条体压痕文上器で、本群第2類と胎土や出土地点が近く共存する可能性がある。第4類は山形の貝殻腹縁文や斜交条痕文が施された深鉢形土器であり、出土地が近く、文様や胎土の類似と併せ一括性が高い。打越式の新段階に位置付けられる。第5類はF-1炉穴で出土した。口縁部に幅の狭い文様帶を持つ特徴から、子母口式から野島式の古段階に比定される可能性もあるが、具体的な形式は不明である。第6類は口縁部に縦位の貼付文が施された深鉢形土器で、口縁は段部で区画され肥厚したように見える。厚手の織維土器で、金雲母が多く含まれる。同様の貼付文を持つ土器は市内の談合坂遺跡4号住居に類似例がある。また、長野県中越遺跡10号住居にも類似例があるが、胎土や分布圏など異なる点も多い。第7類は神之木台や下吉井式期に比定される。

石器の分布は土器と同じ傾向だが、黒曜石やチャートの剥片が調査区西端（J-20区）で集中した。石器は凹石と磨石類が主体を占め、食料となる動植物の粉碎や磨り潰し作業が活発に行われたものと推定される。

近隣における縄文時代の遺跡に穴沢遺跡がある。ここでは複数の落し穴や石器・凹石・磨石類を主とする石器構成から、狩猟や動植物の加工場としての機能が想定される。居住を主とする新屋原遺跡と対照的な方を示しており、同一の地域内で異なる土地利用があったことがうかがえる。

おわりに

新屋原遺跡の発掘調査は、上野原町に埋蔵文化財担当職員が採用されてから初めての大規模調査であったが、現場の運営や調査を職員1名で担当する体制については、市内の考古学関係者から厳しい批判をいただくなど課題を残した。また、調査の過程では他遺跡の緊急調査で大幅な作業スケジュールの中断を余儀なくされ、遺構検出が厳冬期に重なるなど様々な困難に直面した。幸い当時の上野原町埋蔵文化財調査会や山梨県教育委員会・上野原町役場・教育委員会の職員、さらに県内外の考古学関係者など多くの方々から多大な支援をいただき、調査を完了することができた。土壤が凍りつく厳冬期に休日返上で作業に従事していただいた地元参加者の支援も忘れない。末筆にあたり、関係者の方々に深く感謝するとともに、報告書の刊行が大きく遅れたことをお詫びいたします。

写真図版

図版 1



調査前全景



調査前全景



H-4 住居址

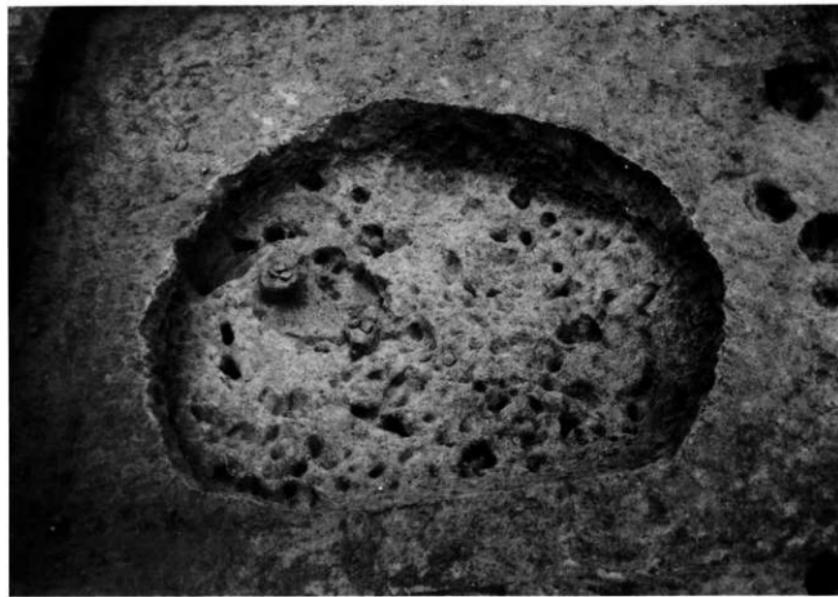


K-18 住居址

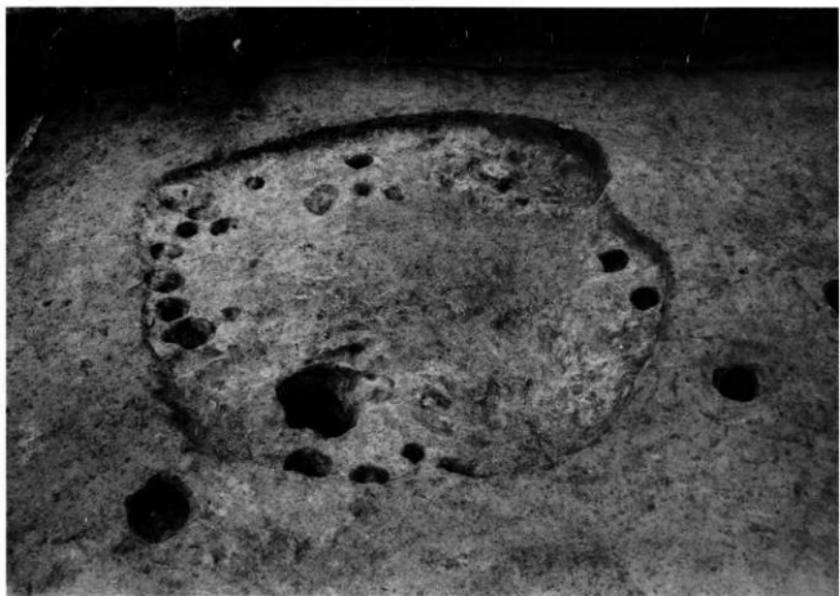
図版 3



I-20 壘穴



G-4 壘穴



G-5 壁穴



G-5 炉穴

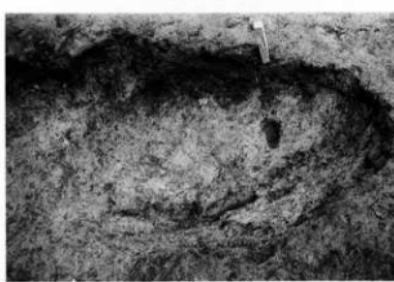
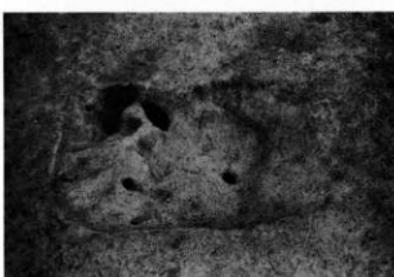
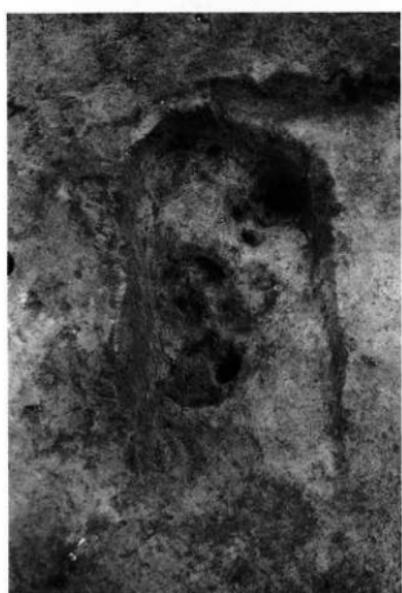
図版 5



G-5 ピット列



F-1 炉穴

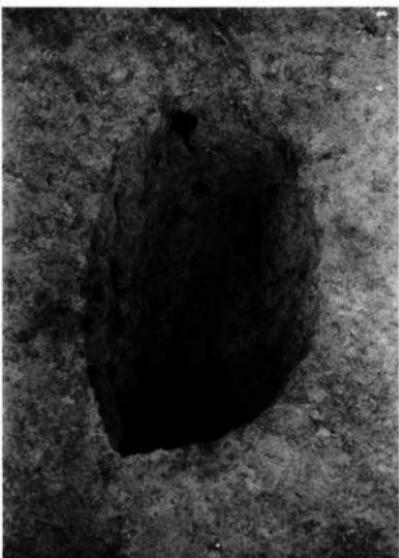


I-20 土坑土層断面

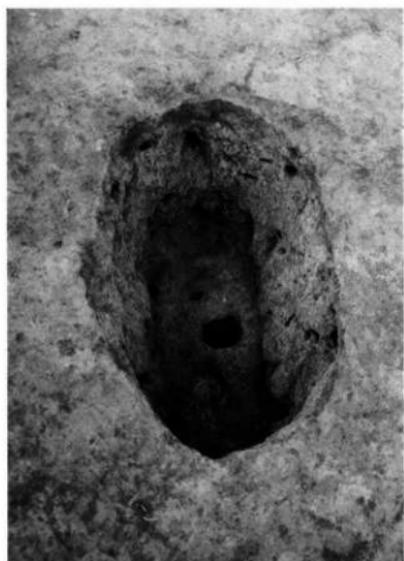
図版 7



C-3 土坑



E-2 土坑



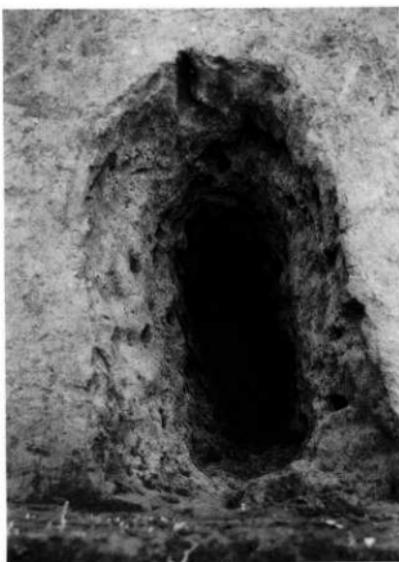
G-11 土坑



H-18 土坑



I-15区2号土坑



I-7土坑



J-15土坑



G-19土坑

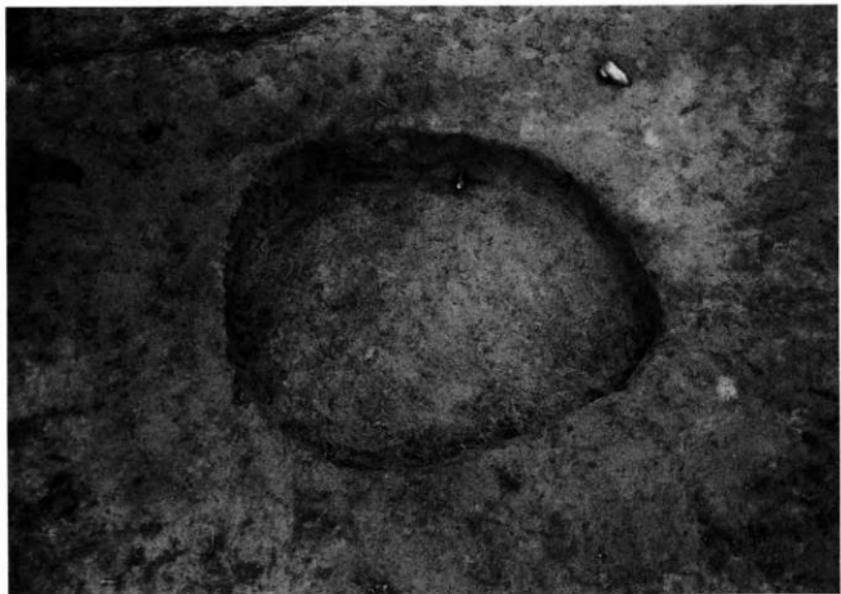
図版 9



G-4 集石



J-16 集石



I - 17 土坑



I - 16 烧土址

図版 11



J-20 落ち込み確認状況



同 完掘状況



K-20 落ち込み確認状況



同 完掘状況

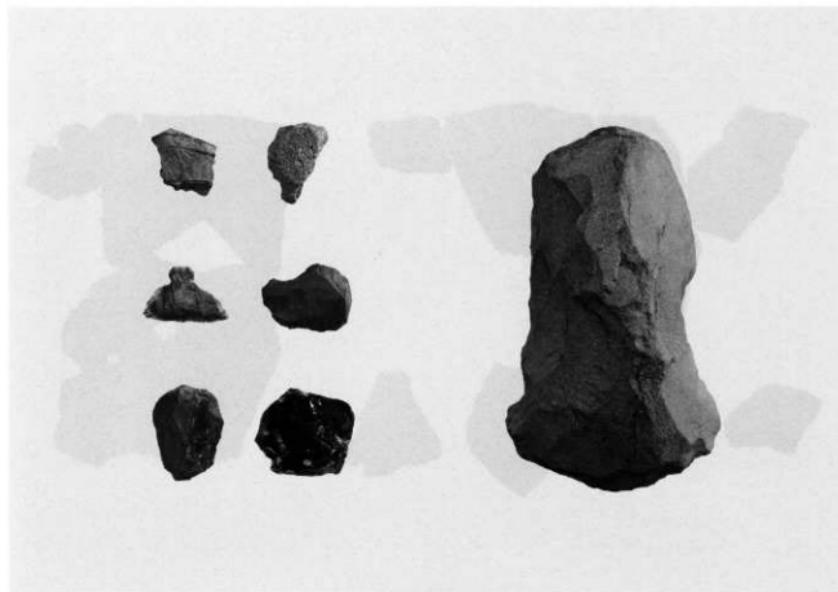
図版 13



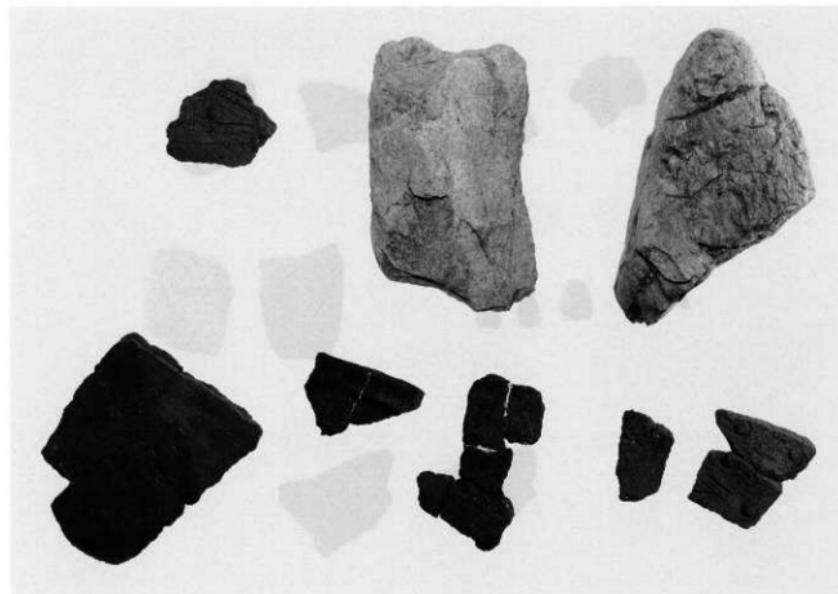
調査風景



調査風景

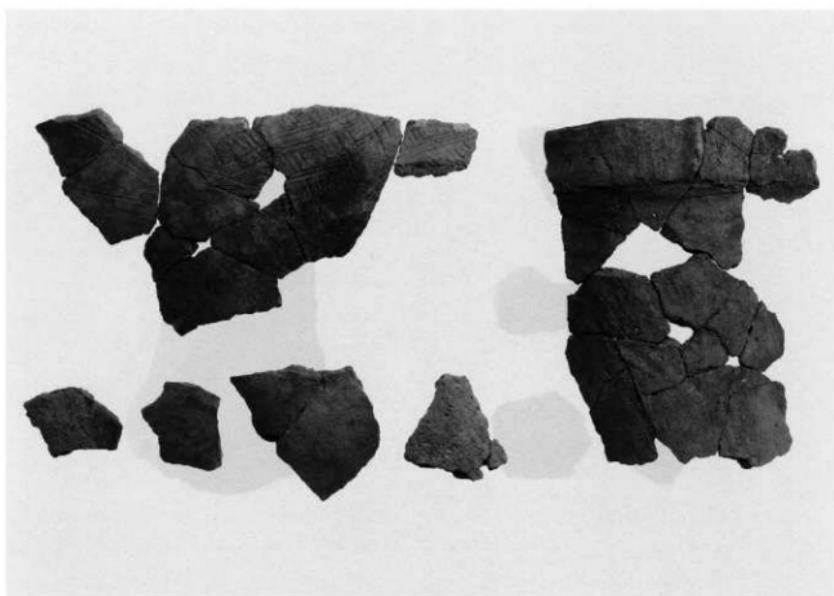


K-18 住 出土遺物



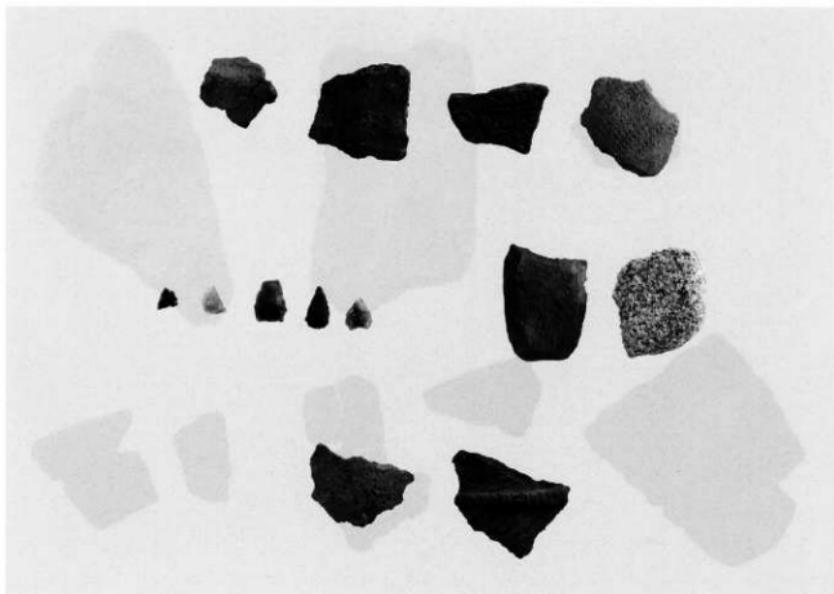
I-20 竪穴、G-4 竪穴、F-1 炉穴、L-22 土坑 出土遺物

図版 15

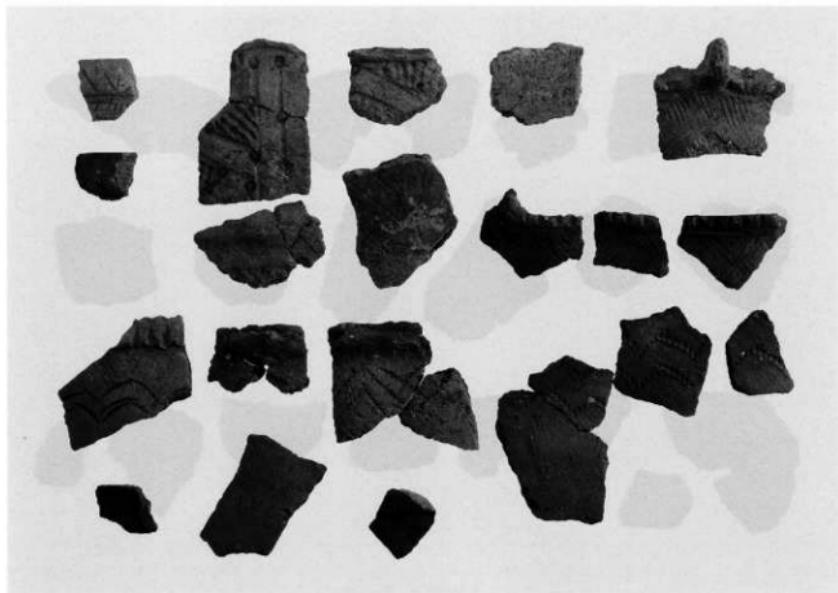


F - 4 土器集中部

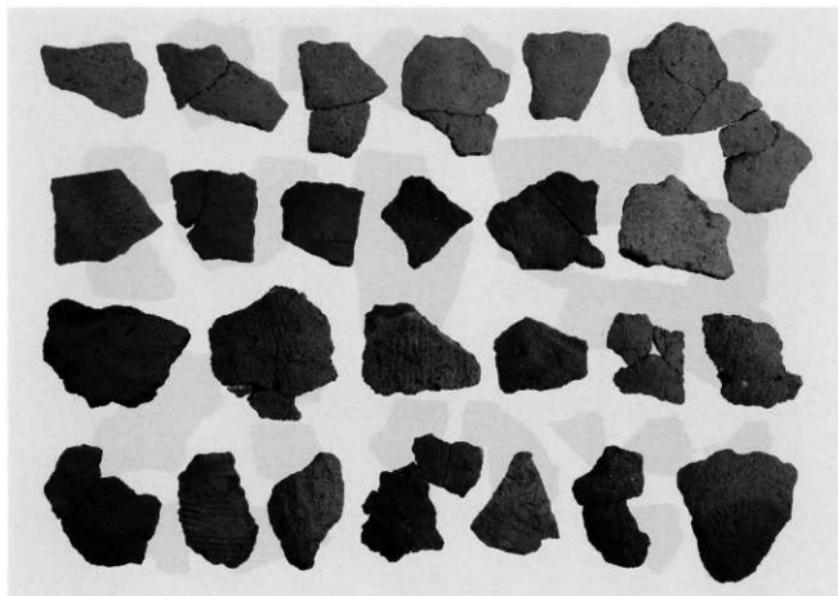
J - 18 土器



J - 20 · K - 20 落ち込み 出土遺物

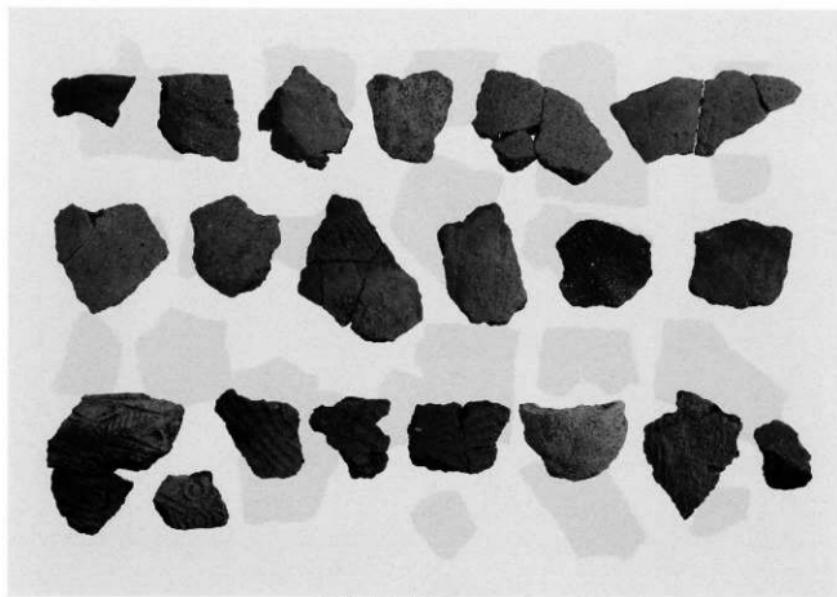


遺構外出土土器（1～18）

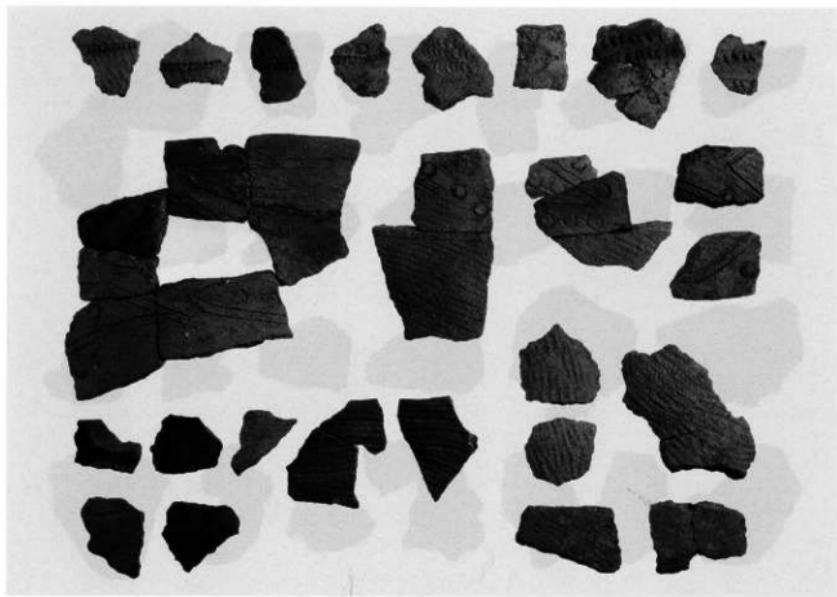


遺構外出土土器（19～43）

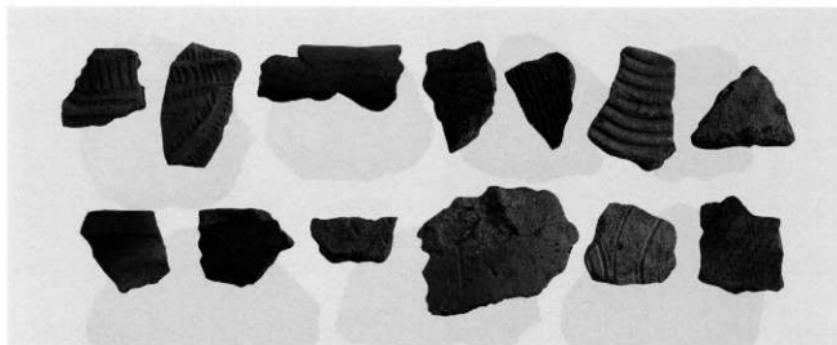
図版 17



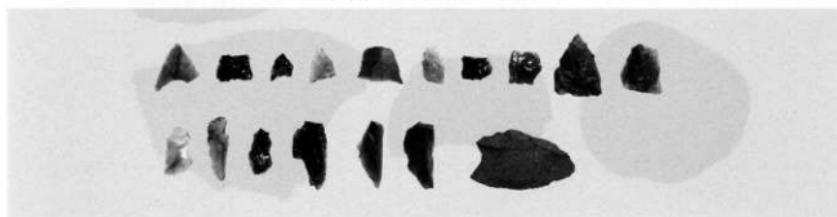
遺構外出土土器 (45 ~ 64)



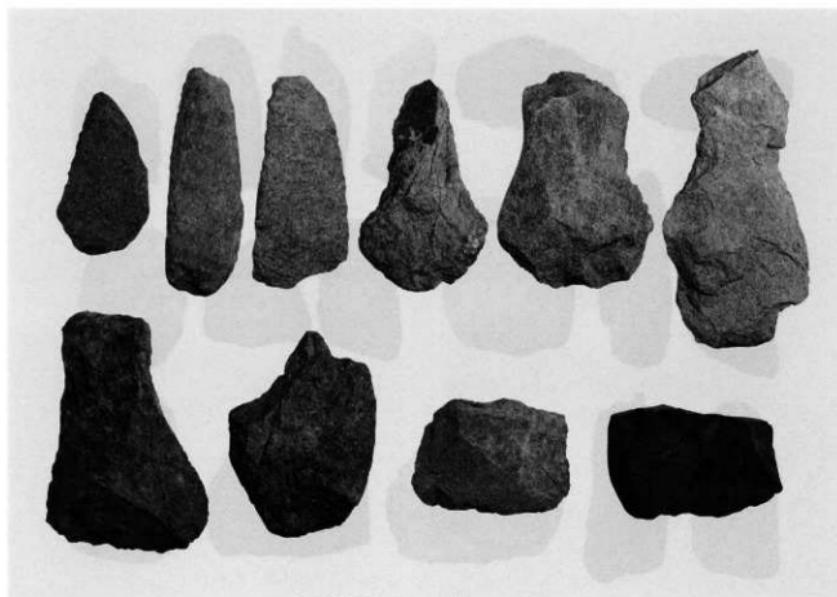
遺構外出土土器 (65 ~ 89)



遺構外出土土器 (90 ~ 102)

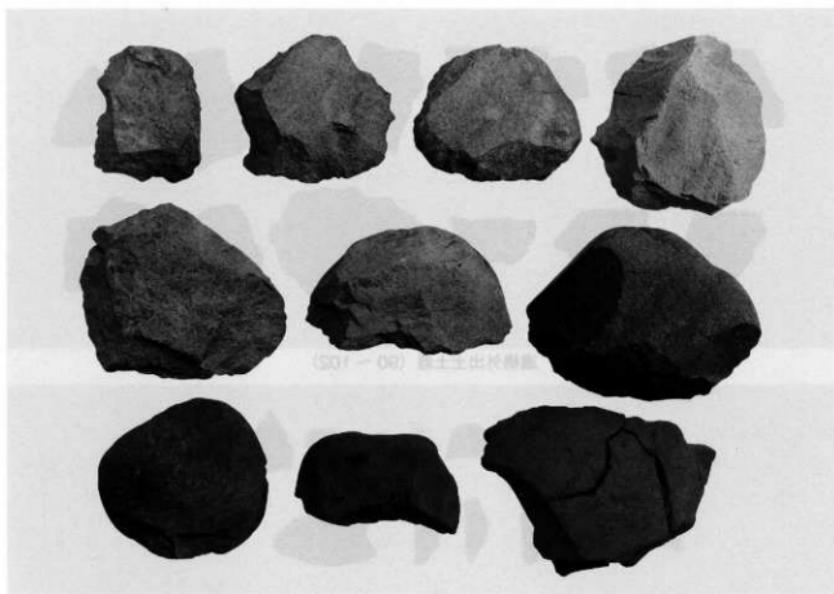


遺構外出土石器 (1 ~ 17)

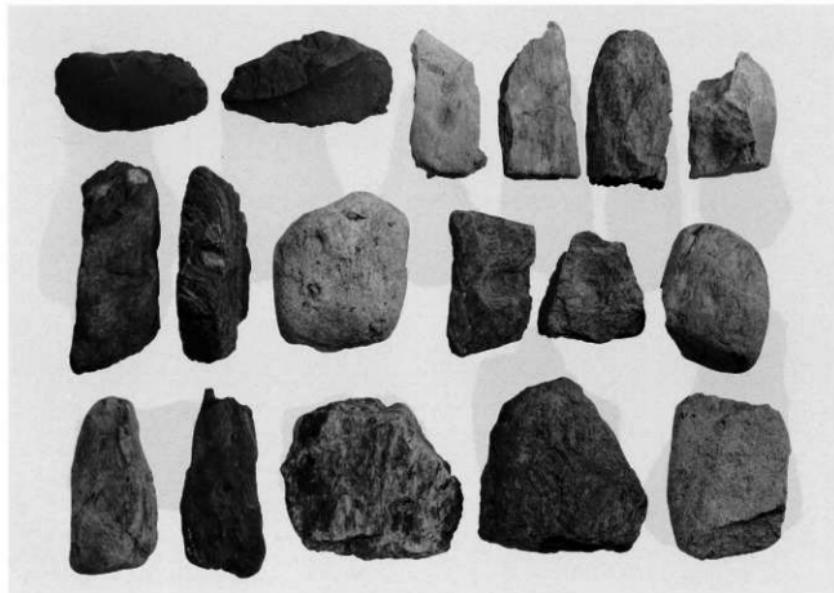


遺構外出土石器 (18 ~ 27)

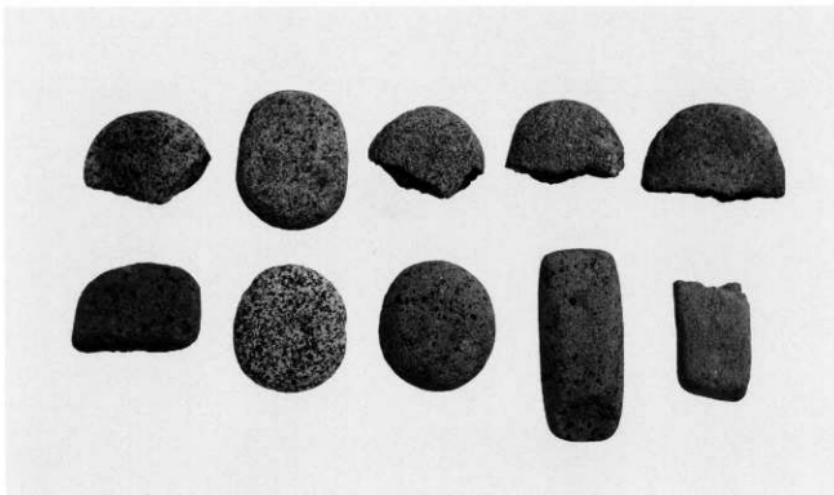
図版 19



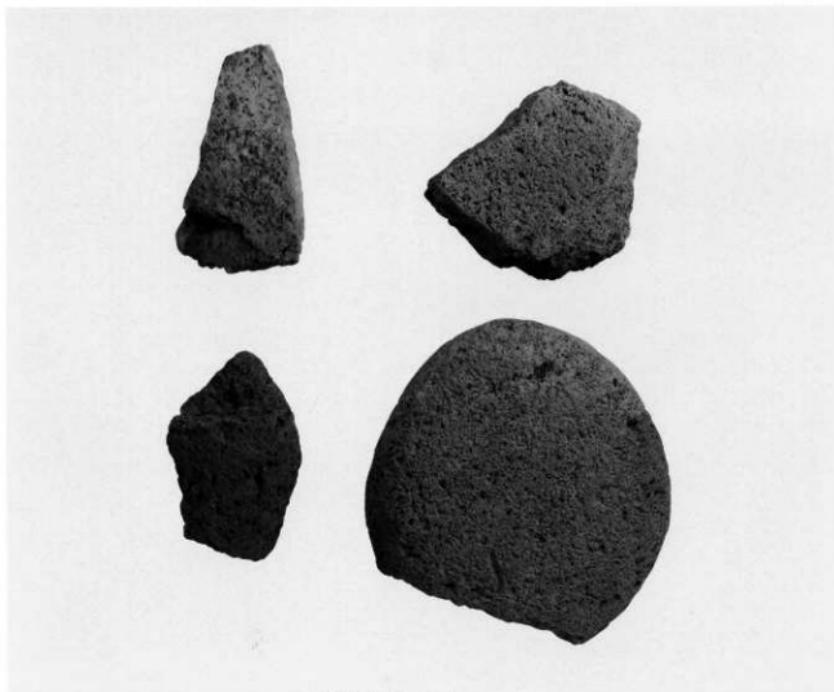
遺構外出土石器 (28 ~ 37)



遺構外出土石器 (38 ~ 56)



造構外出土石器（57～66）



造構外出土石器（67～70）

報告書概要

フリガナ	ニイヤハライセキ
書名	新屋原遺跡
副題	旧東相模ゴルフクラブ3番ホールコース改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	上野原市埋蔵文化財調査報告書 第5集
著者名	小西直樹
発行者	上野原市教育委員会
編集機関	上野原市教育委員会
住所・電話	〒409-0112 山梨県上野原市上野原 3832 電話 0554-62-3409
印刷所	カヤヌマ印刷
発行日	平成23年(2011)3月31日
新屋原遺跡	所在地 山梨県上野原市桐原字新屋原
	地図名 1/25000 上野原 北緯35°39'35" 東経139°6'42" 標高373m
概要	主な時代 繩文時代、奈良時代から平安時代
	主な遺構 繩文時代の竪穴住居址、竪穴状遺構、ピット列、炉穴、焼土址、土坑、集石、遺物集中部。奈良時代から平安時代の土坑、焼土址
	主な遺物 繩文式土器(早期から後期)・石器、土師器・須恵器
	調査期間 平成元年(1987)9月26日～平成2年(1988)2月10日

上野原市埋蔵文化財調査報告書 第5集

新屋原遺跡

平成23年(2011)3月31日発行

編集・発行 上野原市教育委員会

